

平成十八年寺前会

永代供養と奥三河古戦場の旅



寺前会永代供養と奥三河古戦場旅の目次

(H18・5・／31～6／1)

案内書	・・・1	設楽町詳細地図	・・・7
案内書の地図	・・・2	鳳来町～長篠町地図	・・・7
まえがき	・・・3	鳳来町・鳳来寺山・東照宮	・8
愛知県・東海地図	・・・4	鳳来寺（山）感懐	・・・9
豊橋～鳳来町間地図	・・・5	長篠の役	・・・10
野田城と武田信玄	・・・5	易で占った長篠合戦	・・・20
鳳来町～東栄町		付記 桶狭間の役	・・・25
設楽町間の地図	・・・6	あとがき	・・・30
東栄町の詳細図	・・・6		



案内書

寺前会の会員各位

平成 18 年 2 月吉日

当番幹事 渡津、川田、石原、林

寺前会の永代供養と奥三河古戦場の旅のご案内

謹啓 早春の候となりましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。加齢と共に故障も多くなりがちで持病治療中の方々には改めてお見舞い申し上げます。

さて本年の寺前会は慶泉寺渡津住職のおはからいで、物故者会員の霊を弔うと同時に、会員の一層の絆を深めるためにも永代供養を行いたいと思います。(最近同寺ではお庭に大仏を建造された機会に、羅漢のお一人の背面に「寺前会永代供養塔— 四ノ九士官候補生有志一同」と記銘)。翌日は鶯の囀るなか奥三河の鳳来寺や古戦場を巡り、晩春の一刻を楽しみたいと思います。ご家族の方々のご参加も歓迎します。

移動は全てマイクロバスで行います。

記

- 1 期 日 : 18 年 5 月 31 日(水)~6 月 1 日(木) 一泊 2 日の旅行
- 2 行 先 : 豊橋から慶泉寺にて法要後、近くの浜沢温泉霊泉閣山の家に一泊
翌日 鳳来寺 長篠城址 設楽原歴史資料館見学後豊橋 15 時帰着予定
- 3 集合場所と時間 : 新幹線豊橋駅西口改札口の前 13 時 00 分
- 4 会 費 : 20,000 円 (ご家族の方は 18,000 円)
- 5 旅行の申し込み先 : 同封の葉書に出欠及び記名
締切日 : 4 月 21 日までに必着 以上

その他

会費は当日徴収 (見学科金及び翌日の昼食代は各自負担に願います)

健康保険証の写し等をご持参下さい

宿泊先 〒441-2301 愛知県北設楽郡設楽町田口浜沢 14 霊泉閣山の家 Tel.05366-2-0520

行程 豊橋駅 (出発 13:00) = 慶泉寺 (着 15:00~16:30) = 山の家 (着 17:30 頃)

翌日 山の家 (発 9:00) = 鳳来寺 (9:50~10:30) = 長篠城址 (11:10~11:30) = 設楽
原歴史資料館 (11:40~12:10) = 豊川竹水亭にて昼食 (着 12:45 ~ 発 13:45) =
豊川稲荷 (14:00~14:20) = 豊橋駅 (14:50 着解散)

ご不明の点や連絡事項あれば林までご連絡下さい

Tel & FAX 052-701-0294 (林 光春)

寺前会 奥三河古戦場の旅

(平成 18 年 5 月 31 日(水) ~ 6 月 1 日)

出席 本人 朱 席

ご同伴者 人

(何れかに〇印。4 月 21 日必着で返信のと)

9220244

住 所 〒 加賀市山代温泉神明町 7 の 3

寺 前 信 次

氏 名 & Tel. Tel.0761-76-0321

(名簿訂正のため必ずご記入下さい)

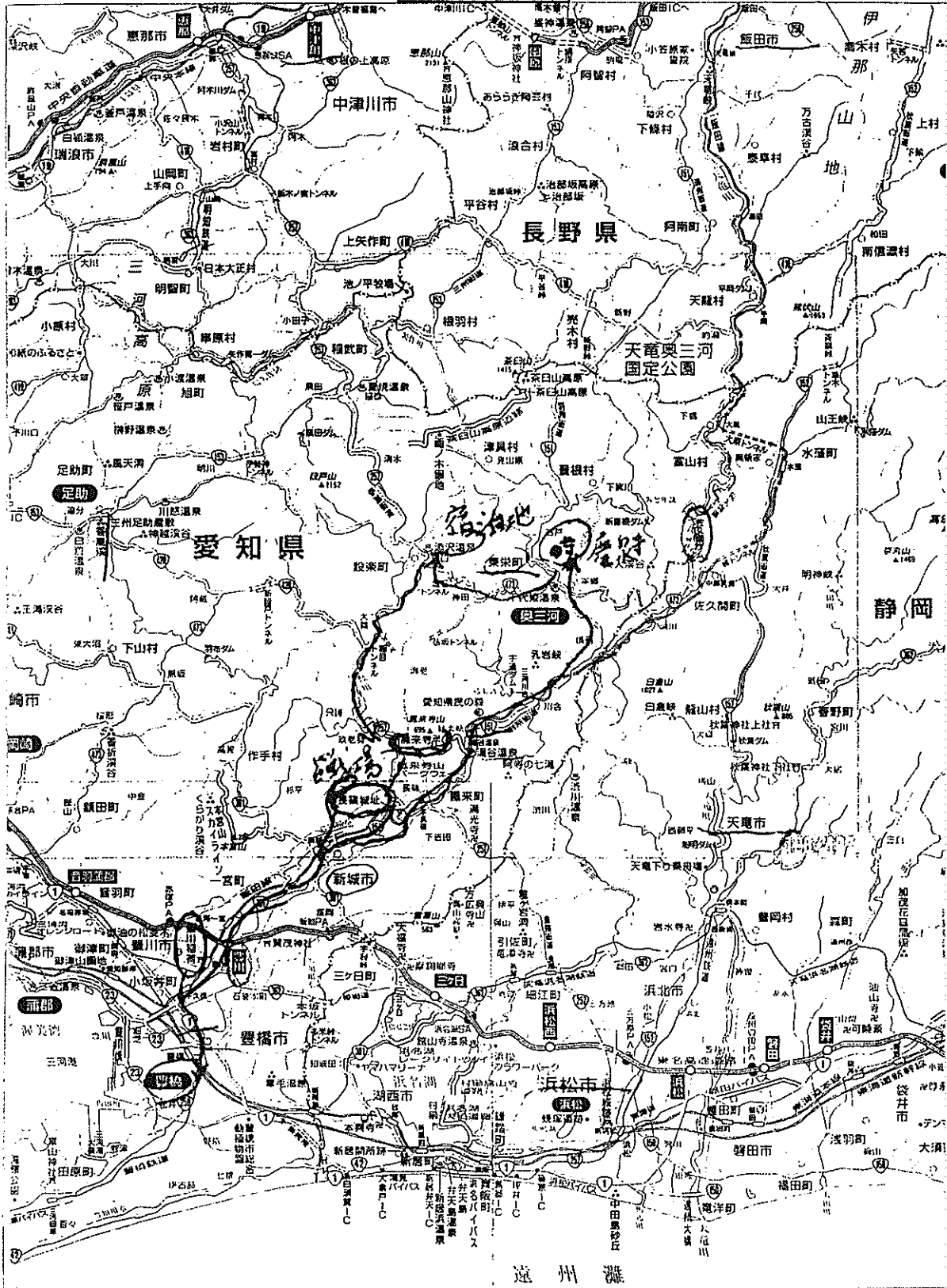
近 況 (健康状態、趣味、日常生活等)

御案内を頂き有り難く参加させて頂きます。病の跡のよう
な身に更に緑内障が加わり、病気は総合病社化し、没年
近しと感じおります。体力的に更に出版することは不能だ
が休むことを知らず、現在は「葛学」に執筆中。参加者数
が決定すれば御一報を願います。昭和 63 年に長篠城址・
鳳来寺山を訪れているから、その長篠の攻防戦の戦跡経過
の概要を印刷配布する予定です。

私の
返
信
葉
書



案内状地図



まえがき

昭和43年8月(1968)、四谷見附の偕行社に於いて第1回の区隊会が開催されて「寺前会」と命名され、今年は第38回目である。「歲月人を待たず」の感が強い。

幹事各位の計らいで今年は「長篠の役」などの古戦場巡りと、渡津弘道猊下の慶泉寺に建立された羅漢像に、「寺前会永代供養 四ノ九士官候補生有志一同」と記銘され、物故者の霊を弔うことになった。この感無量の心境は表現する術を知らない。

古戦場巡りの感想及び私の戦闘体験から、歴史は人間の苦闘の記録だと理解される。だから歴史や古典を学ばなければならない。先人の智慧を学ぶことは、少なくとも厳しい現実生きる者にとっては大いに参考になると信じている。「温故知新」は我々の耳に聒聒(タコ)が出来るほど聞かされたが、歴史を深く探求することによって、現代への認識を深められるのである。私はこれが指揮官・指導者の資質だと解釈したい。

卓越した指導者になるためには、「愛」と「威」の二つの条件さえあれば、それで十分だと『尉繚子』(ウツリョウシ)という兵法書に書いてある。「愛」とは愛情、温情、思いやりである。「威」とは重圧感を与えるような強さ、厳しさを云う。何れも統率力に関係した言葉で、士は己を知る者の為(ため)に死す「士為知己者死」となるのであろう。

『書経』に「満招損、謙受益」(満は損を招き、謙は益を受く)とある。「満」は慢心、「謙」は謙虚である。自分の力をたのんで力づくで相手を押さえ込もうとする態度、自分の能力を鼻にかけて人を見下ろすような態度、己の方が上だからお前たちに教えてやると云った態度、凡てこれは「満」の心である。それがなぜ損を招くのか。それには次の二つの理由が挙げられる。

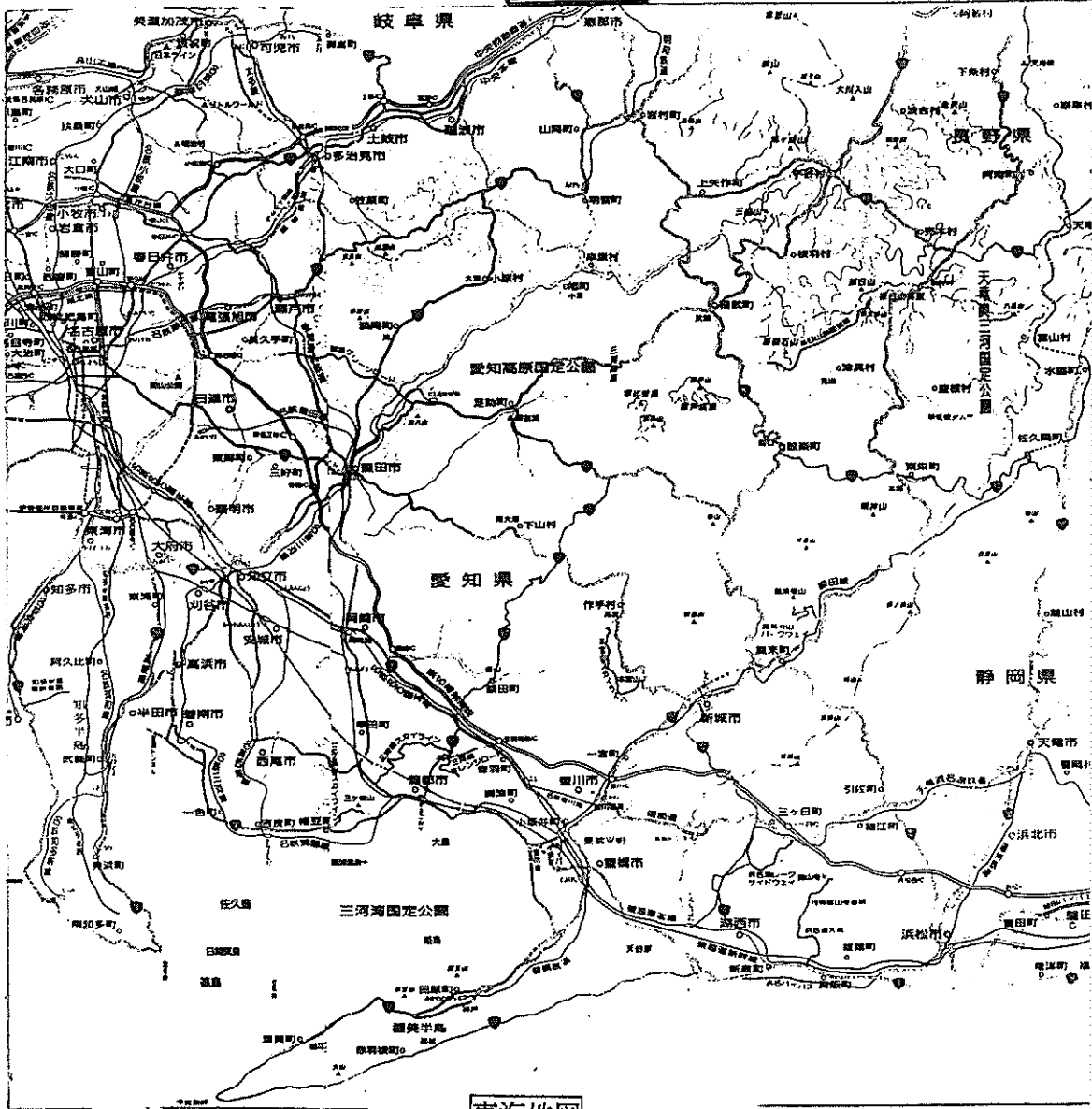
①、自分自身はそれ以上の進歩、向上が望めない。②、必ず周囲の反発を受ける。「満」はこのような二重の意味でマイナスである。その点「謙」は逆の作用をもっている。こちらが謙虚な態度に出れば、かえって周囲の支持を集めると云うのである。

『易経』に云う「知者」とは、単なる物知りではなく、自らの進退に就いて、適切な判断を下せる者である。『孫子』には「將軍之事、静以幽」(軍に将たる事は静にして以て幽なり)と書いてある。軍を率いる時の心構えは、「静」であり「幽」でなければならない。「幽」とは測り知れない奥が深い意味で、指揮官は諸々の謀を胸の奥に秘め、じっくり構え、やたらに軽挙妄動したり、不安動揺を外に表わしてはならない。

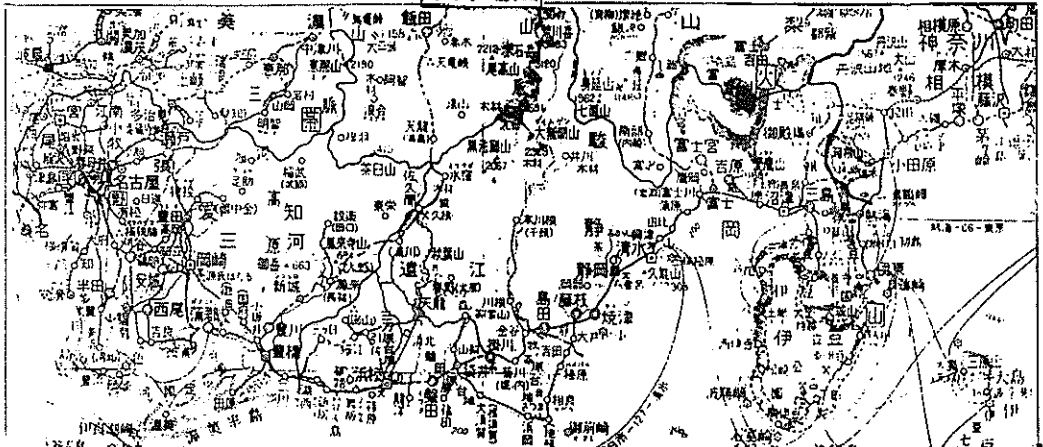
『易経』に「羝羊(ティョウ)、藩(マガキ)に触れて、其の角を羸(クル)しむ」とある。牡(オス)の羊が藩(マガキ)に角をつっこみ、その角のために進むことも退くことも出来ないで苦しむと云う意味である。これは昔から戦争に適用される教訓だが、大東亜戦争に於いて日本軍は、太平洋の全域に逐次、兵力を分散配置した。その愚は、私は児戯に等しいと考えている。洋の東西を問わず兵力の逐次使用は厳禁であった。

「長篠の役」前後の乱世時代は価値変革期であった。だから各武将は長期戦と使命感に基づく応変の術を研究探索し、混迷の時代を乗り切らなければならなかった。その政治、軍政、戦略、戦術等の総合統率力は、現代人も学ばなければならない。

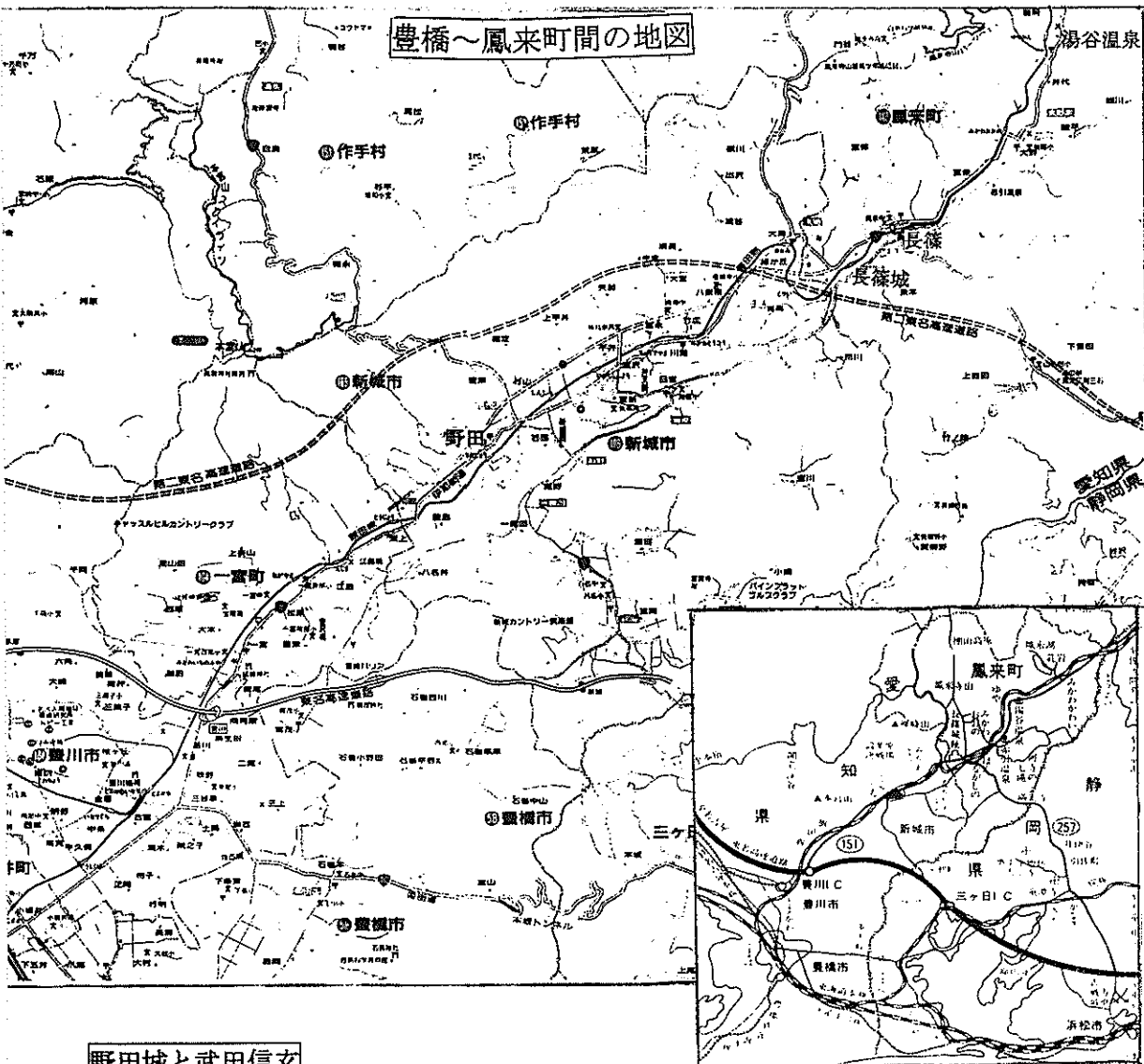
愛知県地図



東海地図



豊橋～鳳来町間の地図



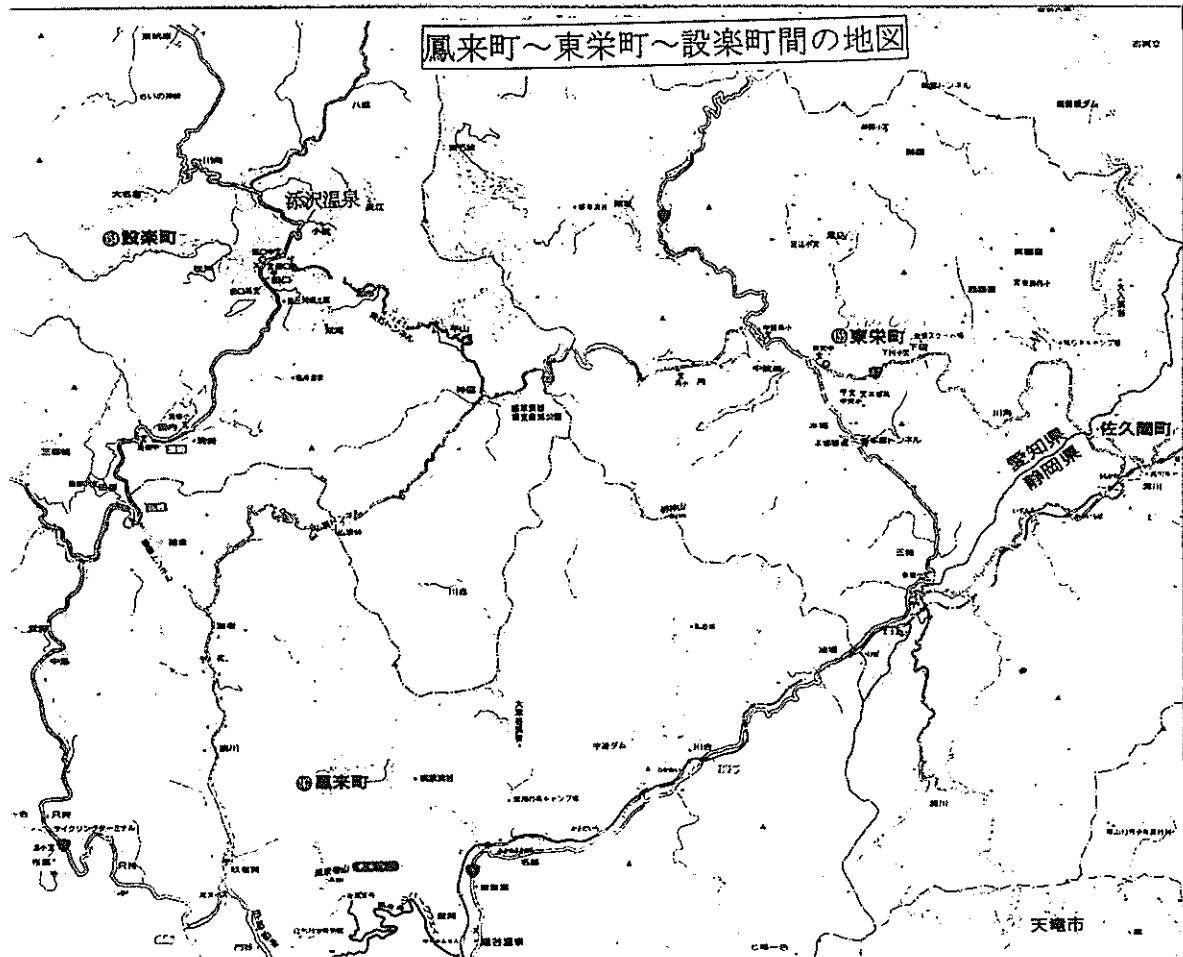
野田城と武田信玄

三方原の役は武田信玄の大勝利に終わり、年あけた元亀（1573）の正月、信玄は三河に侵入して野田城を包囲した。徳川の属将である城主「菅沼定盈」（サダミツ）は危急を浜松の家康に報告した。家康は野田城を救おうとして救援に向かったが武田の大軍に圧迫され、重囲の野田城は信玄に降伏した。しかし信玄の病は昂進していた。

連戦の過労が労咳（ロウガイ）をつのらせ、信玄は陣営を去って鳳来寺でしばらく療養したが快くならず、一旦、甲府に引き上げることにした。しかし信州伊那郡の駒場で死亡した。53歳であった。

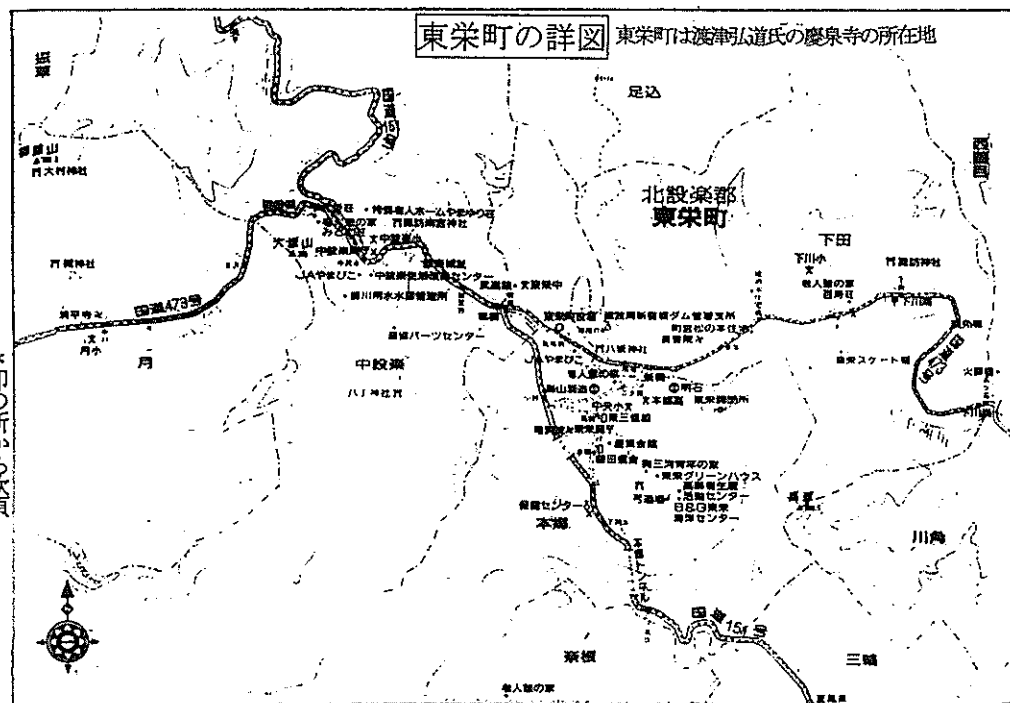
信玄の死については異説がある。「文武茶談」などの記録では、城中からの笛の音に聞きほれた信玄は城に近づき、鉄砲の狙撃で負傷し、それが原因で死亡したと言う。また「松平記」によると、野田の城兵が落城で退散した際に、信玄の本陣に向かって発砲し、その弾の一つが信玄に当たり、負傷して病をえたと云う。

鳳来町～東栄町～設楽町間の地図

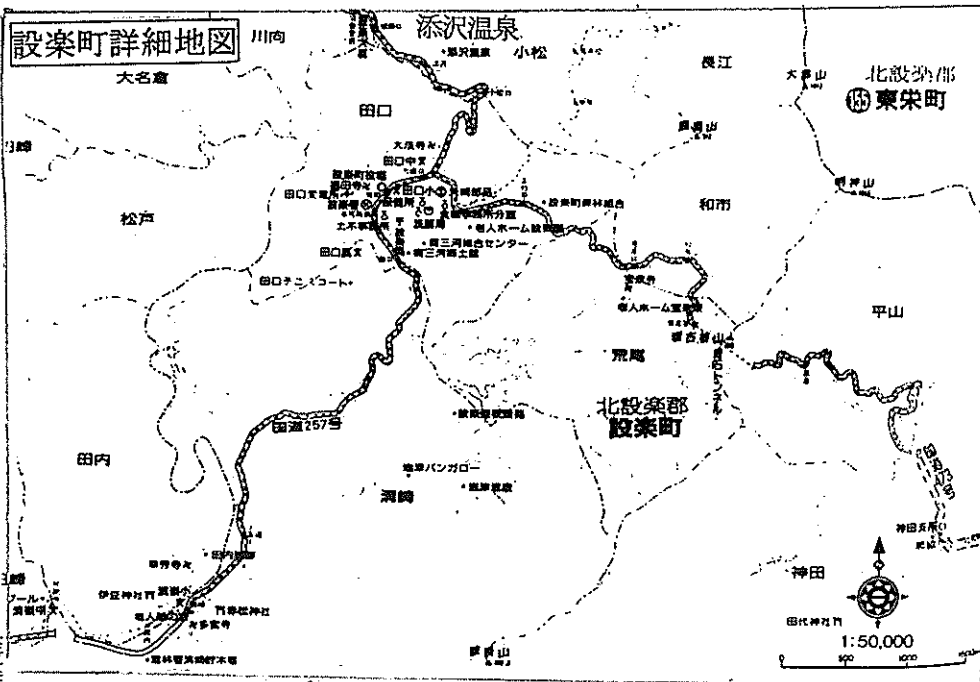


東栄町の詳図

東栄町は渡津弘道氏の慶泉寺の所在地

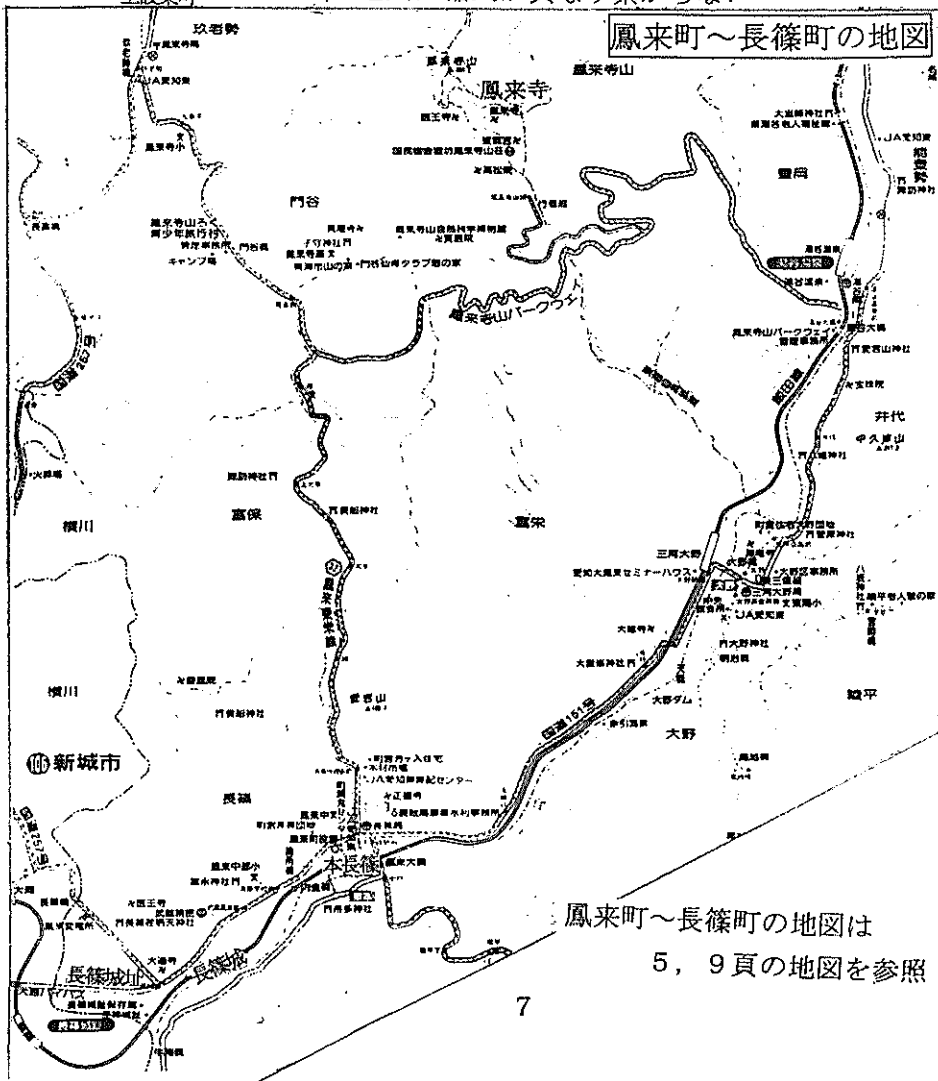


設楽町地図の*の所につなぐ



前頁下図の*印の所からこの
設楽町地図の*の所に続く

至設楽町 上と下との地図は縮尺が異なり繋がらない



鳳来町～長篠町の地図は
5, 9 頁の地図を参照

鳳来寺

鳳来寺は真言宗五智教団の本山で、文武天皇の大宝3年(703)、利修仙人によって開山され、のちに源頼朝の再興となったと伝えられる。利修仙人作の本尊薬師如来を祭り、薬師信仰と山岳修験道の霊山として信仰を集めた。

五智教団は密教で、大日如来のもつ五つに分けたものである。大円鏡智・平等性智・(ビョウドウシヨウチ)・妙観察智(ミョウカンザツチ)・成所作智(ジョウショサチ)の「四智」(シチ)に、四智の根本である法界体性智(ホツカイタイシヨウチ)を加えたもので、四智・五智如来である。

江戸時代になってからは、松平宏忠と夫人於大の方が鳳来寺の峯薬師如来に子授けを祈願し、家康を授かったという徳川家康誕生の縁起によって幕府の厚い保護を受け、三代將軍家光の時には21院坊、寺領千三百五十石という盛大さであった。

(右は鳳来寺の本堂、昭和63年9月撮影)



鳳来寺山

(昭和6年7月31日 国指定 名勝天然記念物に指定)

鳳来寺山の最高峰は瑠璃山(684m)で、流紋岩、松脂岩、凝灰岩などから構成され、約2、000万年前に激しい火山活動によって噴出し、その後の長い間の風化侵蝕作用によって、今日のように複雑で険しい地形が出来あがったもので、山の斜面は急で、奇岩が聳え、数10mの絶壁をなしている所が多い。山頂近くの奥の院からは、目前に東三河から渥美半島までの眺望を楽しむことができる。表参道から石段を登ると両側は老杉が鬱蒼と生い茂り、昼なお暗く、5月から7月にかけて霊鳥「仏法僧」の声を聞くことができる。



(上の写真は鳳来山東照宮の正面、昭和63年9月23日撮影)

鳳来山東照宮

(昭和28年11月14日 国の重要文化財に指定)

慶安元年(1648)4月、3代將軍徳川家光が日光東照宮参詣の折り、「日光東照宮御縁起」を見て、家康の父宏忠が夫人於大の方とともに鳳来寺の本尊薬師如来に祈願して家康が生まれたことを知り、報恩のために東照宮の建築を命じ、4代將軍家綱が慶安4年9月に完成させた。

全国には多くの東照宮があるが、日光、久能山とともに三東照宮と呼ばれている。

(上記の記事は鳳来町観光協会観光発行のガイドマップの一部を参照した)

鳳来寺（山）感懷

鳳凰の雄を鳳といい、雌を鳳という。聖人が出現すると現れると云う目出度い想像上の鳥の名称だから鳳来寺と名付けたのであろう。

鳳来山で仏法僧と鳴く鳥の声は聞くことは出来なかった。この鳥はブッポウソウと鳴くコノハヅクで、全長約30センチ、全身青緑色で嘴と脚が赤く、日本には夏鳥として渡来して繁殖し冬は南方に渡ると言う。（右は概要図）

何故私は鳳来寺（山）を訪れたのかは忘れたが、長篠の役が主目的であったことは確かである。しかし18年も昔のことだから完全に忘却の彼方に在り、山積したアルバムを紐解いて記憶の糸を手繰り寄せてみた。

名古屋緑区にある岳父母の墓参を済ませた翌日、JR豊橋駅で乗り換えて飯田線の本長篠駅で下車した。鳳来寺までのバスの便は当時は一往復しかなく、バスは寺の広場から直ぐ折り返したため止むを得ず帰路は1425の急峻な石段を徒歩で降った。（右は寺院群）

石段のことは観光後に判明したことで当時の鳳来山観光ガイドは誠に貧弱であった。私は未だ60代後半の年齢だったから、汗びっしょりになって石段を降ったことを思い出す。そして山脚の食堂で摂った美味しい味は忘れられない。（右は古寺の一つ）

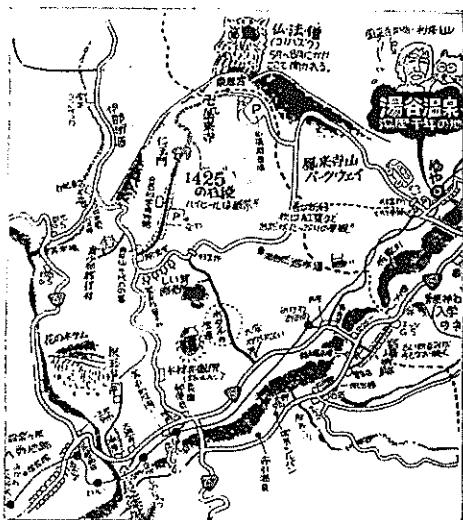
しかしこの記事を書いていると過ぎ去った歳月の速さに驚かされ、今回の寺前会で再び訪れる機会を得て懐旧の情に駆られている次第である。

鳳来寺山は自然・文化・歴史など学術上貴重なものが沢山あり、文人は俳句・短歌を遺している。

松尾芭蕉

○こがしらに岩吹きとがる杉間かな
若山牧水

○仏法僧仏法僧と鳴く鳥の
声をまねつつ飲める酒かも
（右は鬱蒼とした1425の石段の景観）



長 篠 の 役

長篠の合戦で勝敗が決したのは設楽原であったが、長篠の役という名称は既に人口に膾炙しているのでこれに従うことにした。

長篠の役以前の諸豪の概要

織田・徳川と武田の決戦

桶狭間と姉川の役を織田信長の上洛のための緒戦と見れば、次の三方が原と長篠の役は、信長が全国統一のための中盤戦と言ってよ



長篠城址の南端

かろう。桶狭間の相手は東海の雄・今川義元、姉川の相手は北陸・江北の雄である朝倉・浅井であったが、三方が原の相手方は東国の強豪・武田信玄であり、長篠の相手は信玄の嗣子・武田勝頼であった。（上の写真は長篠城址の南端）

この四度の戦役のうち、最初の桶狭間だけは信長独力で敵を破ったが、次の姉川は、桶狭間の戦勝直後に同盟を結んだ徳川家康の援助によって勝利した。次の三方が原は、家康の危急を救おうとして共に敗れた。次の長篠において信長は、家康との共同作戦によって武田に大勝し、三方が原の恥辱を雪ぎ、家康への不義理を挽回できた。

戦争の形式からいえば、桶狭間だけは奇襲戦で、あとの姉川・三方が原・長篠の戦は共に、堂々たる遭遇戦といってよいだろう。

三方が原と長篠の役について述べるにあたって先ず、織田・徳川の相手方である甲斐の武田信玄の動向を見極めねばなるまい。つまり初め、越後の上杉謙信と信州の川中島で決戦を交えるために、つとめて和親をはかっていた三河の徳川家康や尾張の織田信長に対して、信玄がなぜ、挑戦しなければならなかったかに就いて、説明する。

武田信玄は甲斐の大名で、越後の上杉謙信と信州の川中島で五回も戦ったことで有名である。その頃、南方の駿河には今川氏、東南の相模を中心とする関東地方に小田原・北条氏が、それぞれ勢力を張っていた。また、北方の越後に上杉がおり、西の信濃には小笠原・村上・木曾・諏訪・平賀・高遠の土豪が蟠居していた。そして美濃は土岐氏の支配下にあった。

このうち今川義元が、駿河・高遠・三河の三ヶ国を征服し、海道一の弓取りと呼ばれるようになった。そこで武田の信虎は、その娘を義元に嫁がせ、今川と友好関係を保つことにつとめた。が、今川にも増して強いのは、相模の小田原北条であった。そこで信虎も、これには敬遠方針を取った。比較的弱いのが信濃の国であり、ここには多くの土豪が割拠しているに過ぎない。それに目を付けた信虎は天文五年（1536）の十二月、信州南部に侵入し、海野の城主・平賀源心を攻めた。この時、信虎の嫡男

武田晴信（信玄）は十六歳で初陣し、武略をめぐらして源心を討ち取った。

武田信虎は勇猛峻厳な武将であったが、暴虐の行いが多く、次第に家臣の人望を失い、武田の重臣と今川義元の計らいで、駿河の府中（静岡）に隠退させられた。その後で晴信が家督を相続し、武田宗家十九世の当主となったのである。ときに、天文十年（1541）の六月、晴信は二十一歳であった。この晴信が入道し「信玄」と号した。

川中島の合戦と関東経略は省略する。駿河・遠江・三河を支配し、海道一の弓取りといわれた今川義元は、永禄三年（1560）、西上の軍を起こしたが、尾張の織田信長のために桶狭間で討たれ、その子氏真（ウジザネ）が跡目を相続した。しかし氏真は武略に欠けていた。そのため三河の徳川家康は今川氏の支配下から離脱し、岡崎城主として独立し、信長と清洲同盟を結んだ。

家康を味方にした信長は、齋藤竜興を討ち亡ぼして美濃（岐阜県）を平定し、岐阜に根城を移した。永禄十一年（1568）九月、前將軍足利義輝の弟義昭（ヨシアキ）を奉じて上洛し、義輝を殺して足利幕府の政権を剥奪した三好三人衆を追討し、松永久秀を降伏させた。義昭は信長の助力で足利十五代將軍となり、二条城に納まった。

時局はこのような急転回したが武田信玄は今川氏真の弱みにつけこみ、駿河の侵略に着手した。しかし、三河の家康とは同年（永禄十一年）二月、すでに同盟を結んでいた。そのため東西から、今川の領国である駿河と遠江を攻略することになった。

信玄は同年の十二月十三日、今川軍を破って駿河の府中（静岡）に乱入したため、氏真は遠江の掛川に逃れた。信玄が氏真を攻めた理由は、氏真が越後の上杉謙信と共謀して、信玄を討とうとたくらんだからと云うが、それは単なる口実に過ぎない。

ところが、其の後まもなく、信玄の武将で信濃の高遠城にいた秋山信友が、下伊奈衆を率いて伊奈口から遠江に侵入して見付に陣を張り、徳川がたに所属している武将らの兵と交戦したため、家康は信玄に嚴重な抗議をしている。信玄は家康の抗議に対し、信玄の全く存知せぬところだと弁解している。ともかく信玄は、越後の上杉や相模・伊豆の北条に対処するため、家康や信長と事を起こすことは避けていた。

ことに北条氏との関係は次第に悪化したが、その北条と武田の戦は省略する。

武田と北条との戦は元龜二年（1571）にも続行されたが、また、この年から信玄の遠江・三河侵攻作戦が展開されることになった。信玄は三月になると大井川を渡って遠江に侵入し、徳川の属城・高天神（タカテンジン）と掛塚を攻め、四月には東三河に進出し、野田城と吉田城を囲んだが、容易に落ちないと見て五月になると甲府に引き上げた。いよいよ徳川領に対する信玄の侵攻作戦が開始されたのである。

そのころ上方では、足利將軍義昭と不和となった織田信長が、八方に強敵を引き受けて悪戦苦闘していた。ところが信長を追討せよと云う義昭の御内書が、年があげた元龜三年（1572）の五月十三日、はるばる甲府の武田信玄の手元にも届いた。

この御内書は、これより少し前に信玄が、義昭の要望に答え、足利將軍に忠節を尽くすべきことを誓った起請文（キシヨウモン）の主旨を襲めたもので、義昭としてはこれによって遂に、甲斐の強豪武田信玄を味方に引き入れことに成功したのであった。

大和の国多聞山（タモンヤマ）城主の松永久秀からも、信玄宛に密書が届いた。久秀は十三代将軍足利義昭（義昭の兄）を殺害させた張本人だが、信長が義昭を戴いて上洛すると直ちに降参した。そこで信長から大和の国を与えられて多聞山城に居したが、十五代将軍となった義昭が信長を嫌い、諸国の大名や寺院に信長追討の御内書を送った。

その御内書に感激した大名や僧侶たちが信長追討作戦を展開し、そのために信長の立場が苦しくなってくると、秀久はひそかに叛逆を企てた。そして武田信玄に密書を送り、その上洛を促したのであった。

信玄西上の大志は、この時、心中に覚悟として定められたと云ってよいだろう。そこで信玄は将軍足利義昭の意向を容れ、信長追討の作戦にあたって、そのころ信長が当面の強敵として対峙していた越前（福井）の朝倉義景や江北（滋賀）の浅井長政と連略を取り、信長挟撃作戦を計画したのであった。

西上の用意を整えた信玄は元龜三年九月三日甲府を出発し、北条氏政の援軍を加えた総勢二万七千が遠江に侵入を開始した。当時の信玄は宿痾（シュクア）の労咳（ハイケッカ）に悩まされていたらしい。遠江に侵入した信玄の本隊は一言坂（ヒトコトザカ）で徳川家康の武将大久保忠世を一蹴し、二俣城を襲った。家康は武田軍が余りにも優勢なのを見て浜松に引き上げた。

信玄はまた、別働隊を三河に侵入させ、同時に武將秋山信友に命じて、信州の伊奈口から美濃に進出し、岩村城を攻めさせた。岩村城は十一月十四日に落ち、更に進んで明智城も陥れた。

信玄からの書状を受け取った越前の朝倉義景は信玄の西上と呼応し、信長を江北の陣営に釘付けにし、遠江に出陣中の家康との連略を断ち切らしたるに、江北小谷城の浅井長政と共に信長に対して攻勢に転じたのであった。

このことは信長にとっても、同盟関係の家康にとっても、実に最悪の事態が迫っていたのであった。不思議なことに、岐阜城危うしと知った信長が江北の陣営を撤去すると、殆んど同時に朝倉義景は一万五千の大軍を越前に引き上げてしまった。こうなると信玄は怒りにまかせて遠州二俣城を強引に攻め落とし、東三河に侵入しようとした。信玄の頭の中は、上洛の宿望遂行しかなかったのである。

遠州三方が原の合戦

家康は浜松城にあって変化する武田軍の動静を息を殺して見守っていた。武田の本隊が浜松城に殺到してくるのか、或は北に迂回して西上を続けるのか、これは家康にとって重大事であった。

ところが元龜三年（1572）十二月二十一日夜、物見の武士が浜松に戻り、信玄は明日、野辺を発して三河東部に向かおうとしていると報告した。家康は徳川の諸將を集めて軍議を開いた。

家康は初めから、城を出て戦うことを主張していた。しかし老臣たちは、敵の兵力が三万を越え、信玄も兵法にたけている。これに比べ徳川方は僅か八千に過ぎないから、みだりに挑戦すべきでないと諫めた。

しかし家康は、敵が浜松城外近くを通過するのに対して一矢も加えず、見過ごすのは弓矢の名折れである。勝敗の運は天にあり兵力の多少によらぬ、と云って遂に出でて戦うことに軍議が一決した。信長に対する面目もあった。

武田の総勢二万七千は十二月二十二日、遠江の野辺を出発して天竜川を渡り、三方が原に登ろうとした。一方の家康は、信玄の西進の報告に接すると、信長から派遣された援兵三千を加え合わせて約一万の軍勢を率い、三方が原に到り待ち受けていた。

この時、武田の方が敵情を観察させた結果、徳川方は全軍を単陣の鶴翼に構え、その兵力は武田の五分の一に過ぎなかった（鶴翼とは、兵法の八陣の一つ。ツルが翼を広げたような形に軍を配置すること。敵を包囲しようとする陣形）。織田軍も整っていない状態だった。そこで信玄は初めて戦鬪を決意し、全軍を魚鱗の形に配置した（兵法の八陣の一つ。中央が突き出た陣形）。鶴翼は横隊、魚鱗は縦隊の形である。

戦鬪は武田軍の先鋒が、近づく織田軍に向かって挑戦したのをきっかけに、全面的に開始された。結果は兵力の相違がものをいって徳川軍は押し捲られ、壊滅の危機に瀕した。形勢の不利を悟った家康は退却を命じ、家康はようやく浜松城内に逃げ入ることができたと言われている。

浜松城内では、夜襲のことを進言した武将がおり、家康はこれを許可すると、約百人の射手を集めて銃撃の奇襲を試みた。しかし、この奇襲隊はまもなく撃退された。

三方が原の戦は武田信玄の大勝利に終り、徳川軍の死者千百八十人に比べて、武田方は四百九人、つまり半数以下であった。

武田信玄の死亡

年があけて、元亀四年（1573）の正月、信玄は三河に侵入して野田城を包囲した。徳川の属将である城主の菅沼定盈（サダミツ）は、危急を浜松に報告した。それから武田信玄の死亡に就いては5頁に地図とともに記載済みで、それを参考とされたい。

徳川家康の長篠奪還

遠江の三方が原で武田信玄と戦って大敗した徳川家康は、信玄の死を知ると、早くも三河の長篠城を攻めた。

長篠は南設楽郡にあって、信濃の伊奈口から三河に出るには必ず通過しなければならない重要な地点であり、これを押さえる必要があった。長篠城は、今川氏親（義元の父）の武将菅沼元成が築城して以来、代々、菅沼の居城となり、この頃は元成から四代目の正貞が城主であった。しかし正貞は元亀二年（1571）、徳川方を離反して武田に従属し、家康が長篠の奪還を図ったときは、信濃衆の室賀信俊・小笠原信嶺らが在番していたのである。

家康の長篠攻めを知った信玄の嗣子武田勝頼は、八千余の軍勢をつかわし、長篠の急をすくわせたけれども、長篠の北方、伊奈口近くにある作手（ツクデ）の城主・奥平貞能・信昌父子が武田に背き、徳川に内通したため、長篠城は元亀四年（1573）の九月、家康の手に落ちたのであった。

武田勝頼の高天神奪取

年があけて天正二年（1574）になると、武田勝頼は東美濃に出陣して岩村地方を侵し、明智城に迫った。急報に接した織田信長は嫡男の信忠と共に、東美濃に出馬したが武田勢と衝突することもなく、やがて岐阜に兵を納めている。

徳川家康はこの隙を窺って三河の足助（アスケ）に出馬し、折から上州の沼田に出陣してきた上杉謙信と呼応し、遠江・駿河における武田の属城を攻めようと画策した。

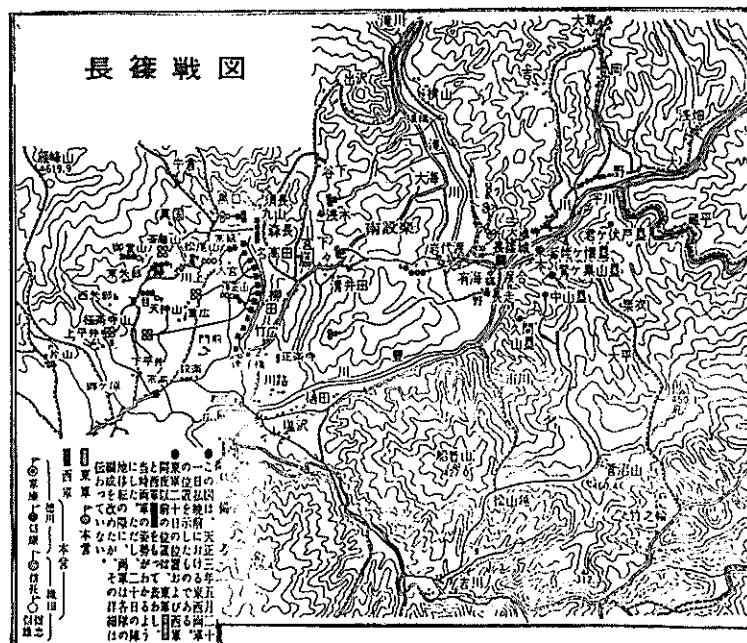
家康は、あるいは駿河に入って田中城を脅かし、あるいは遠江北部に入って乾城を攻めたりして、勝頼は遠江に出馬し、高天神城を包囲した。

高天神は遠江の南部における最も重要な城で、徳川方にとっては、この方面の押さえとなっていたのである。小笠原長忠が先祖代々からこれを守り、武田信玄の攻撃を受けても追い返してきた。それを信玄の息子の勝頼が猛攻したのである。

急を聞いた家康は浜松から援兵を出そうとし、信長にも助けを求めたため、信長も援兵を出す用意をしたが、その援兵の届かないうちに高天神は、武田勝頼の猛攻によって七月十二日に落城してしまった。そのため勝頼は武田の実力を過信してしまった。

勝頼は武勇に優れて血気盛んな三十歳に達していたから、高天神奪取で大いに自信を得、信玄の遺志をついで西上の宿望を果たそうと翌天正三年（1575）の長篠城の攻撃となったのである。

長篠城の攻防戦



天正三年二月二十八日、徳川家康は奥平貞能の子信昌を長篠の城主と定めた。長篠は前々年に家康が奪還して以来、城番の制度を採り、守将は一定していなかった。それをこの時、初めて城主制に改め、信昌をこれに当てたのであった。そうして同国御油（ゴユ）の領主松平景忠らを副え、加勢として二の丸に入れ三月には糧食を増やして城の修築も行った。つまり、

武田方に対し籠城の備えを整えたのである。（左図は長篠城図）

四月になると、武田勝頼は約一万五千の大兵を率いて甲府を発し、信濃から三河の足助（アスケ）に出て、そこから作手（ツクデ）に移り、野田へ押し寄せて進んできた。

それから吉田・二連木（ニレンギ）方面に働き、二十一日、長篠城を囲んだ。

長篠城は、豊川の上流、寒狭川（カンサ）（滝川）と大野川（三輪川）とが合流する地点の断崖絶壁の上にある。城址は現在、愛知県南設楽郡鳳来町字長篠に存し、東西約三百二十七メートル、南北約二百五十四メートルである。（前頁の地図参照のこと）

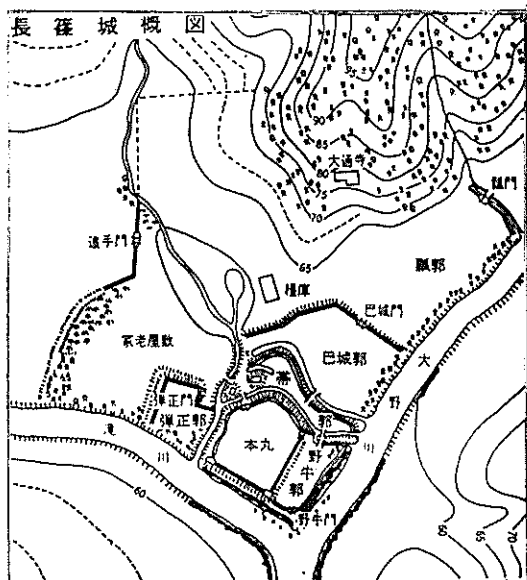
城の機構は「長篠合戦図屏風」や、「長篠城古図」などを見てもわかるように、櫓が唯一つあるだけで、屋根は瓦と板とが交じり、塀はみな置き土で、藁葺きになっている。極めて簡素な造りであつたらしい。（下図は長篠合戦図屏風の図）



野牛曲輪（クルワ）が両川合流の絶壁上に位置し、そこに野牛門があり、それに細長い橋を架けている。そこを渡合（ドアイ）と呼び、その西北に本丸があり、その東北に二の丸（帯曲輪）があり、その東北に三の丸（巴曲輪）があった。そのほかに瓢曲輪（フクベクルワ）があるし、また、本丸の西に弾正曲輪（ダンジョウクルワ）というのがあった。それから家老屋敷があり、西北に追手、東北に搦手（カラメテ）がある。

この長篠城攻めにあたって、武田勝頼は本陣を城北の医王寺山におき（次頁地図参照）、先鋒を大通寺山（右図参照）に進め、長篠を眼下に見下ろす体制をとった。

（右は長篠城の概要図）



武田軍の攻撃は五月十一日から開始された。この日は、南手の渡合と（ドアイ、寒狭川と三輪川の合流点）にある野牛門（南の門）に押し寄せ、門のわきに竹把（タケタバ）で仕寄（シヨリ）をつけ、これを攻めた。しかし城兵は直ちに斬って出て、反撃を加えたため武田勢は竹把を焼いて退却した。十二日から十三日にかけて激戦が展開されたが、十三日の夜の瓢曲輪の戦が最も激しく、城兵みよく防いだけれけど、障壁が破れたため城主

の奥平信昌は守兵を本丸に引き上げさせている。瓢曲輪は遂に武田勢に占領された。十四日には武田軍の総攻撃が行われ、追手口に迫って兵糧蔵を攻め落としたため、城内の糧食もあと数日しか支えられなくなってきた。元来、狭い区域に築かれた山城のことだから、少し日数をかけて包囲すれば、忽ち糧食に困窮するわけである。

城内の将兵は武田勢に包囲され、外部との交渉を全く断たれてしまった。この際、徳川家康が来援してくれるか、または織田信長が出陣してくれるか、それも判明しない。ともかく外部の味方と連絡をとることが痛切に必要なようになってきた。

その使者に選ばれ、岡崎まで潜行して使命を果たしたのが有名な鳥居強右衛門であった。彼は帰途、武田勢に捕らわれ、援兵の到来することを大声で長篠城内に報告したため、武田勝頼のために磔（ハリッケ）の刑に処せられた。

織田信長の長篠赴援

織田信長は盟友徳川家康から長篠救援のことを懇願されて快諾し、同年（天正三年）の五月十三日に岐阜を出発した。ただし出馬に際して、各方面から鉄砲と銃手と、それから馬塞（ウマフサギ）の柵木（サクギ）を集めたことは注目に値する。

十四日、岡崎に到着した信長は十八日、設楽（シタラ）郷の極楽寺山（14頁地図の左側の高地）に陣をすえ、嫡男信忠はその北方の新御堂山（14頁地図の左側）に陣取った。総数およそ三万。先陣は三河衆であった。家康は、ころみつ坂を登り、高松山（彈正山・14頁地図の左側）に陣取った。徳川軍の総勢はおよそ八千であった。

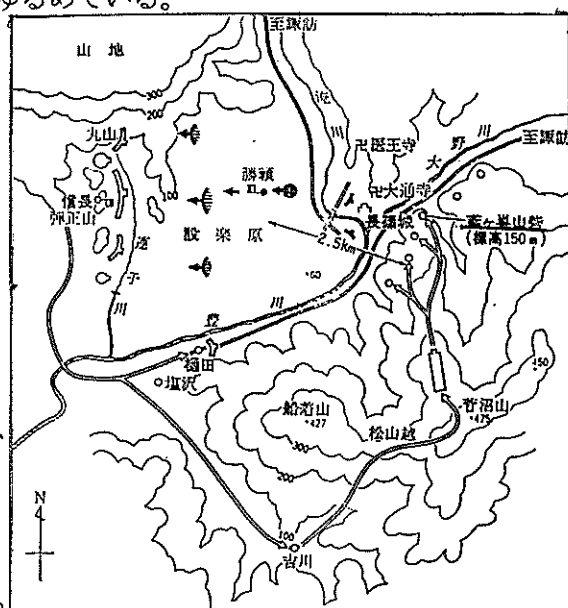
信長は高松山の家康の陣地の前に馬塞ぎの柵木を構えさせたが、その左（北側）に織田の武将・滝川一益・羽柴秀吉・丹羽長秀らを布陣させ、その前にも東（敵方）に面して、この馬塞ぎの柵を構えさせている。

この織田・徳川の長篠急援軍の進出に対して武田勝頼は直ちに決戦を決意し、五月十四日ごろから、長篠城の攻撃の手をゆるめている。

鷲ヶ巣山の奇襲（右図参照）

五月二十日、信長は家康の老臣酒井忠次を将として、徳川方の射手・銃手二千人、信長馬廻りの鉄砲五百挺、これに目付けとして金森長近らを忠次に副え、合計四千人ほどで、大野川（乗本川、今は三輪川）を越えて、南の吉川を回り、鷲ヶ巣山の武田軍の砦に向かわせた。（右図の船着山を迂回する作戦）

翌日、忠次の兵は鷲ヶ巣山にのぼり、旗をかかげて関（トキ）をつくり、数百挺の銃砲で射撃した。鷲ヶ巣山の砦では、武田方の将兵はよく防戦したが、何れも討死して残兵は四方に敗走した。



そこで酒井忠次の部隊は更に長篠の城兵と連絡し、相呼応して武田軍を猛攻した。そのため武田方の諸塁は陥落し、また城兵の突出によって、長篠城を包囲していた武田の武将・高坂昌澄も戦死した。

鷹ヶ巣山の奇襲作戦は、それ自体、全体の戦局にそれほど大きな影響を及ぼしたとは云えないが、この奇襲の成功が血の気の多い武田の総大将勝頼を緒戦から憤激させ、武田の全軍を設楽原（シトラハラ）に誘致せしめたのであった。

設楽原の決戦（前頁地図と右下の地図を参照）

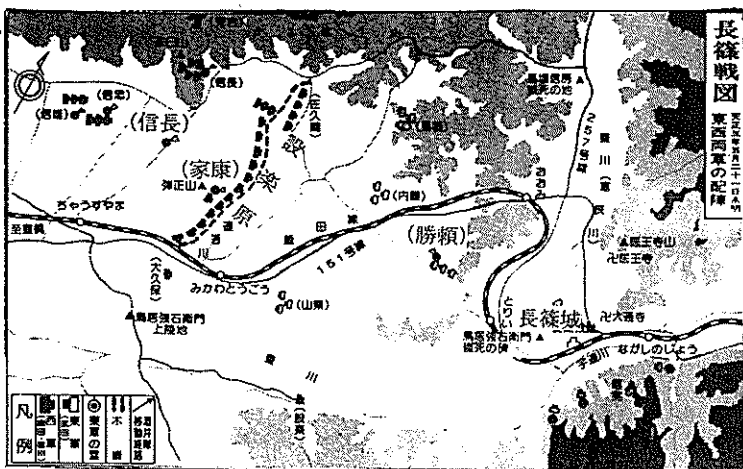
武田勝頼は五月二十日、医王寺山（長篠城の北方）の本陣を出発し、寒狭川（滝川）を渡って柳田（14頁地図の左側）の山に陣を移した。これに対し信長も高松山に陣を移し、家康も弾正山に軍を進めた。

勝頼は一万五千の武田軍を十三段に構え、信長と家康の陣地に向かって突撃を開始した。左翼は山県昌景・武田信豊など。右翼は馬場信春・真田信綱など。中央は武田信廉・内藤昌豊など、信玄以来の強者が進んでいった。

これに対し信長方は、柵の外に佐久間信盛の部隊がおり、家康側は、連子川（前頁地図参照）南端の連子橋がわに大久保忠世・忠佐の部隊が控えていて、大久保の方から誘いの足軽を出した。それに応じて武田方の左翼の山県隊がまず進み、ついで右翼の馬場隊、中央の武田隊が押していった。しかし武田隊の多くは騎馬であるから、馬塞ぎの柵木に支えられ、馬が躊躇して進めない。信長方はその虚をねらい、三千挺の鉄砲を三隊に分け、千挺ずつ、代わるがわる一斉狙撃を開始したからたまらない。

そのため山県昌景のような鬼神と恐れられた猛将も、あえなく討死したほか、武田方の名ある武将も算を乱して倒れ、武田方の総敗戦となった。勝頼も危うく鉄砲で撃たれようとしたが、漸く身をもつて遁れている。勇猛をもって世に知られた馬場信春も、勝頼が遠く立ち退いたのを見定め、大海（オオミ・上図参照）の少し北にある出沢で信長の兵に討たれた。また内藤昌豊も勝頼が逃げのびたのを見て敵中に進み入り、やはり討死をとげている。

武田勝頼の敗走に対して信長は全軍の半分ほどの軍勢で、信州の伊奈口近くまで追撃させた。この日、織田・徳川連合軍の討ち取った首は一万五千に達しと言われている。そして家康は、この日、三河の鳳来寺の麓まで行って馬を帰し、信長は二十二日に陣を払って帰途についた。そして二十五日に岐阜に凱旋している。



長篠城攻防戦の戦闘詳報

天正三年五月一日から、武田勢三万余人は長篠に押し寄せた。武田勝頼の命令のもとに、軍勢は峰や谷を取り巻き、城中からは、たとえ鳥ならば飛び出されようが、獣一匹も走り出すことも出来ないほどに囲み、柵を張り巡らせた。

五月十一日、長篠城の南、渡合（ドアイ）の大手まで押し寄せて攻めたが、城兵は鉄砲を撃ちまくり、寄せ手の足並みが少し乱れたところで城門を開き、槍を繰り出して突き崩した。道は一筋だったので西方の谷から、武田勢は横から矢を射って応援することも出来ず、手に汗をかいて戦闘を見ながら、どうすることも出来なかった。このとき寄手三百余りが討たれたということを、敗れて三河に帰った甲州兵が語っている。

その翌々日十三日には、瓢郭というところを武田勢が攻めた。そこは沢の切岸や城壁もない所であると見た武田勢は、そこから攻め入ろうと夜になってから押し寄せた。ところが城主の奥平信昌は、敵は必ず攻めやすい処から来ると思って計略を立てて、ここに鉄砲組を備えておいたのであった。

しかも飛ぶ鳥、走る獣など三つに一つは必ず撃ち落すという手練の鉄砲組を、二百人ほど集めておいた。その上、月明かりなので、見下ろせば昼のように明るいから、狙い通りに撃ちまくった。武田勢は止む無く引き取ったが、其の後も鉄砲に悩まされ、武田勢はこの小城を打ち破りかねていた。

そこで今度は強攻策をとる事にした。先ず第一番に三百人が鉄砲にやられたとする。次の第二番手もまた三百人が討たれたとする。最悪の場合、六百人がやられたとしても、まさか第三番手までが三百人全部がやられることはあるまい。従って足軽の千人たらずを討死させるつもりで掛ければ、その次には城兵が鉄砲の弾込めをする前に押し寄せ、木戸や逆茂木（木の枝を敵方に向けて敵が来れないようにする障害物で、私も支那戦線で良く使用した。これを鹿砦と称していた）を打ち破り、城中の者一人残らず討ち取ろうという命令を出したのである。そして十四日の早朝、力押しに攻めかかった。

だが城内ではこの策もあらかじめ心得ていて、その対策をしていた。中筒（小銃）に火薬をこめておき、敵の大將のいる本陣を遠射し、更に小筒で笹垣に潜む敵を撃った。

その上に五段構えに鉄砲を備えていたので、弾込めの時間も短く、柵際の敵の中備えも討たれた。そのため、渡合の川岸には武田勢が人塚を築くほど討たれている。案に相違した武田勢は、またしても引き上げざるを得なくなったが、一方、城中でもこの日こそ、まさに必死の戦いだったのである。

昭和16年秋九月、黄河渡河作戦で占領した河南省中牟県城の死守の大任を命じられた私は、橋頭堡陣地の最高責任者として砲兵・工兵などの四百名の諸兵を指揮して任務を完遂した体験がある。黄河を背にした背水の陣は、退くこともできず、前面には数百倍の大敵が待ち受け、長篠城の守兵と同様の状態におかれた。

孫子の「九地篇」に、「自軍をもう亡びるしかない処まで投入して、初めて軍の使命を全うする働きが生まれ、死よりほかに道のないところに追い込んで、はじめて生き残る働きが生まれる」と述べている。『投之亡地、然後存。陷之死地、然後生』。

長篠城主・奥平信昌の武功

織田の長男・信忠は徳川家康と共に長篠の城中に入り、城主の奥平信昌に向かって「このたび、六町四方にもたらない小城にこもり、せいぜい城壁の土垣ばかりなのに、よく三万余の大敵を防いだことは、まれにみる功名である」と褒め、援軍の将である松平姓の人々や、奥平姓の人々、援軍の従士たちがよく城を防いだ労を感賞された。

天正三年五月十五日（1575）夜、長篠城へ飛脚がやって来て、ひそかに小門を開いて城中に入り、奥平信昌に信長からの書状を渡した。それによると、後援軍の派遣は難しいので、城は武田方に明け渡すがよろしい、と言うことであった。

奥平信昌はそれを見て暫らくして言った。「これは武田方の謀略であろう。墨に匂いがない。毎度、信長からの書状に接しているが、京都の墨はよく造られていて匂いがある。しかし、甲州の墨はそうではない。これは信長の書ではなく、甲州軍の書いた偽筆に違いない」と。城兵はこれを聞いて勇気を取り戻したのであった。

奥平信昌は学を好み、「易学」をたしなんでいた。その易を占ってみると、武田信玄が死んだという噂は本当らしいと悟った。そこで神君家康よりの勧めもあって信昌は、再び奥平家が神君の味方になることを祖父と父に説き、漸く神君との密約が成った。

ところが武田方では徳川方との作戦上、奥平家に裏切られることを恐れ、人質を出すように申し入れてきた。そこで相談した結果、これを承諾しなければ奥平家の破壊となるから、一旦、人質を出して、また謀りごとをたてようと云うことに決まった。

そこで十三歳の千丸に家臣の墨屋甚九郎を添えて武田方に送った。武田方では千丸の母も人質に出すようにと要求したが、病気と称して断った。

其の後、密使を使って武田家の戦略を神君家康に伝えた。そこで家康は「吉川の谷」（14、16地図の南側）の道に軍勢を動かした。これを見て、武田方は大いに怪しみ、内通した事を悟ったと言う。（下略）

三河武士の意地を見せた鳥居強右衛門（上略）

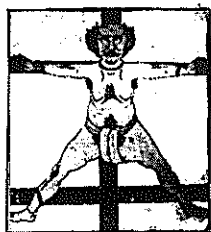
長篠城は城主以下わずか五百の兵で武田勢の猛攻を防いだが、日数がたつうちに兵糧が乏しくなってきた。城主はこの包囲網を突破して家康公に救援を求める使者として、鳥居強右衛門を命じた。五月十四日の夜、野牛門の不浄口から豊川に降り鳴子の網を破って約四^里下流に上陸し、西方の雁峰山（14頁左上）を目指した。

ここで「脱出成功」の狼煙（ノロシ）を上げ、十五日に岡崎城に入り家康、続いて信長に救援を求めた。鳥居強右衛門は城の危急を思い、とって返して十六日に再び雁峰山で「援軍来る」の狼煙を上げた。さらに城内潜入を図ったが捕らえられ、「援軍来たらず」と言われたところ、城に向かって「援軍来る」と叫んで敵を欺いた。そのため捕らえられて磔（ハリツケ）にされて、敵兵の槍先に散ったのである。

（右は鳥居強右衛門磔死の図）

城兵は感激して長篠城を死守し、織田・徳川連合軍の大勝利を招く要因を作った。末永く武士の亀鑑として讃えられている。

磔死の地は17頁地図の長篠城の西側で、駅名にも残されている。



『易で占った長篠合戦』

前頁に長篠城主・奥平信昌は「易学」をたしなんでいたと記述した。奇しくも私は灸の先生から東洋医学の知識を教えられ、更に進んで易にまで手をのびしたのである。

「易」は中国の殷時代（前1600～1020）の亀卜（キボク）に代わって、周時代（前1050?～前256）に生み出された筮竹（セイチク）による占いである。やがて、そのテキストである「易」が整備され、それが經典の座を占めるようになって、筮＝易の地位は不動のものとなり、今日に至っているようである。（經典は周易、或は易經）

書を読み耽っていくと、不明ながら東洋医学は太極へ、太極は陰陽へ、陰陽は道教へ、老子へ、そして陰陽五行説へと進展し、遂に兵法・医術・漢方薬・律暦にまで及んでいく。それは膨大な量であり、そのうえ自分自身の老耄には勝てないから、上滑りで身に付けたものは何一なく、続行できるか否やも全く不明である。

ただ人間に望みを失わせることは、占いの道では禁物と言われるようで、おまけの人生に又、おまけが付いたと思いながら、蠟燭の灯火が消えて行くような感じで、最後の踏ん張りだと挑戦中である。興味のある者は初歩の私を真似して御読み下さい。

「天・沢・火・雷・風・水・山・地」の八つの要素が、自然と人生を支配するものだと、古代の中国人が考えた。そして八つの要素に形として与えられたのが陰陽で、陽は（一）、陰は（--）という記号が使われた。例えば「山」をあらわすには「☶」という形を使って表現しています。なんとなく山という感じがします。又、「沢」をあらわすには「☵」「の形を使います。上がくぼんでいて、なんとなく水たまりのような感じがするようだ。

そして、この八つの要素は、それぞれ、次のような形に決められた。

天 ☰ 乾けん。 沢 ☱ 兌だ。 火 ☲ 離り。 雷 ☳ 震しん。

風 ☴ 巽そん。 水 ☵ 坎かん。 山 ☶ 艮こん。 地 ☷ 坤こん。

自然はこのように八つに分けられた。これを易学では小成八卦（ショウセイハツケ）と云う。しかし人生はもっと複雑である。それで、この八つの要素の二つを上下に組み合わせ、六十四の卦がつくられた。この六十四の卦は、それぞれ名前をもっている。

たとえば、上の卦が ☶（山）で、下の卦が ☵（水）ならば、☶☵ となり、その卦は「山水蒙」（さんすいもう）と名付けられた。

あるいは、上が ☰（天）で、下も ☰（天）の場合は、「乾為天」（けんいてん）と呼ばれた。こうして六十四卦の一つずつに、それぞれ名称が与えられた。

この六十四の卦には沢山な見方がある。たとえば、☶☵ の形を「地天泰」（ちてんたい）と云う。この場合、まず「泰」という意味からも解釈できる。また上に「地」、下に「天」という自然現象からも考えることができる。さらに「坤」（地）には、沢山な意味があり、また「乾」（天）にも沢山な意味があるから、この二つの意味の組み合わせから無数の解釈ができる。無限である。どのように解釈するかが易占いの本質である。

以上、これらは「黄小娥」という人が書いた「易入門」を書き写しである。

小成八卦表

八卦にはどんな意味があるのか。それは表1-八卦の通りで、自然、人間、属性、動物、身体、方角に分けられる。

六十四卦名称

六十四卦の名称を一覧表にしたのが表2-六十四卦で、左側の欄が下の卦で、上の欄が上の卦である。

【表】1-八卦								
	乾 ☰	坤 ☷	震 ☳	巽 ☴	坎 ☵	離 ☲	艮 ☶	兌 ☱
自然	天	地	雷	風(木)	水(雨)	火(日)	山	沢
人間	父	母	長男	長女	中男	中女	少男	少女
属性	健	順	動	入	陷	麗(つく)	止	説(よろこぶ)
動物	馬	牛	竜	雞	豕	雉	狗	羊
身体	首	腹	足	股	耳	目	手	口
方角	西北	西南	東	東南	北	南	東北	西

【表】2-六十四卦								
	【下卦】				【上卦】			
	乾(天) ☰	兌(沢) ☱	離(火) ☲	震(雷) ☳	巽(風) ☴	坎(水) ☵	艮(山) ☶	坤(地) ☷
乾(天) ☰	乾为天 ☰	沢天夬 ☱	火天大有 ☲	雷天大壮 ☳	風天小畜 ☴	水天需 ☵	山天大畜 ☶	地天泰 ☷
兌(沢) ☱	天沢履 ☰	兌為沢 ☱	火沢睽 ☲	雷沢無妄 ☳	風沢中孚 ☴	水沢節 ☵	山沢損 ☶	地沢臨 ☷
離(火) ☲	天火同人 ☲	沢火革 ☱	離為火 ☲	雷火豐隆 ☳	風火家人 ☴	水火既濟 ☵	山火賁 ☶	地火明夷 ☷
震(雷) ☳	天雷无妄 ☳	沢雷隨 ☱	火雷噬嗑 ☲	震為雷 ☳	風雷益 ☴	水雷屯 ☵	山雷頤 ☶	地雷復 ☷
巽(風) ☴	天風姤 ☴	沢風大過 ☱	火風鼎 ☲	雷風恒 ☳	巽為風 ☴	水風井 ☵	山風蠱 ☶	地風升 ☷
坎(水) ☵	天水訟 ☵	沢水困 ☱	火水未濟 ☲	雷水解 ☳	風水渙 ☴	坎為水 ☵	山水蒙 ☶	地水師 ☷
艮(山) ☶	天山遯 ☶	沢山咸 ☱	火山旅 ☲	雷山小過 ☳	風山漸 ☴	水山蹇 ☵	艮為山 ☶	地山謙 ☷
坤(地) ☷	天地否 ☷	沢地萃 ☱	火地晉 ☲	雷地豫 ☳	風地觀 ☴	水地比 ☵	山地剝 ☶	坤為地 ☷

簡単な占う方法

それは「略筮」(リヤクセイ) という方法で、一番多く使われている。筮竹は五十本の竹で、長さは二十四センチぐらいから四十五センチぐらいである。まず五十本の筮竹の中から一本を抜き出して、机の上に置き、残りの四十九本を顔の前に扇形に開き、二つに割ります。

そして、左手に残った筮竹に、右手から一本を加える。つぎに一本加わった左手の筮竹を、八つずつ捨てていく。残ったものは一から八までの数です。その数が、それぞれ八つの形に対応する。

天(一)、沢(二)、火(三)、雷(四)、風(五)、水(六)、山(七)、地(八)というふうにあります。例えば、三つ残ったとすれば(火)です。この形を算木を使って机の上に置きます。

算木とは六本の木片です。一本の木片は、四つの面をもっています。二つの面は一二つの面は-- となっている。一 は陽、-- は陰をあらわすものです。

そうして、もう一度、筮竹を使って、同じことを繰り返して、今度は、既に置かれた算木の上に、二度目の結果を算木を使って置きます。四つ残れば、☳ (雷) です。そしてこの卦は、☳ 「雷火豊」ということになる。

しかしこれよりも、もっと簡単な方法がある。百円硬貨を6枚用意する。占おうとする問題だけを考えながら、6枚の硬貨を手の中で何度か振ってください。それから一枚ずつ、それを抜き出して、必ず、下から上に順番に6枚を並べます。

表を陽一、裏を一陰と考える。年号が書いてあるのが裏です。例えば、表・裏・裏・表・表・裏という順序ならば、䷗ となります。こうして六十四卦の一つの形があらわれます。そして21頁の表2-**六十四卦**を見て、あなたの卦の出ている頁を「本」の中から探し、解説を見てください。そこに出ている解説が、あなたの問題に対する解答なのである。しかし、この本の膨大な内容を解説するまで書くことは出来ません。回答は何れの易の本でも同じですから。興味のある人は易の本を買い求めて研究してください。何れの答えを適用するかは占う人の考え方一つです。

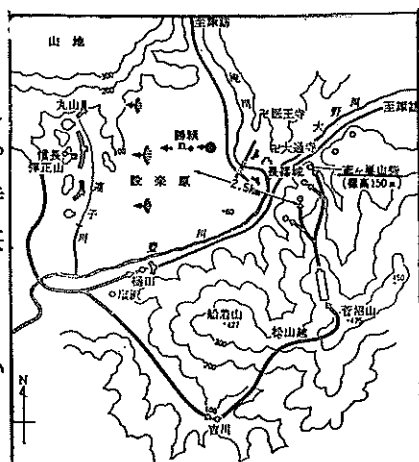
私は21頁の表にあります「乾為天」、「天沢履」、「天火同人」等と出てきた文字の意味を漢和辞典で引きます。私の使用している辞書は大漢語林（大修館書店）です。それと「易経」（エキキョウ）を紐解いて調べます。

寺前会平成十八年「永代供養と奥三河古戦場の旅」の小冊子のため、ここまで書かないと易は解らず、長篠合戦の占いが説明できないために記述しました。

長篠周辺の地形による易判断（右図参照）

長篠城や設楽原の地形を見て判断されることは、山の上に水がある形である。山の水は岩や木の根に妨げられても谷川となり、大きな川に流れ込み、やがては大海に注ぎ込む。占ってこの卦 ䷗ が出た時は、無駄に時間を浪費せず、知識を吸収して時が来たら直ぐ活動できるように、計画することである。

「䷗」これは「水山蹇」（すいざんけん）と称し、寒さにこごえる足を意味している。動きのとれない悪い卦で、四大難卦の一つである。「蹇」（けん）は、足なやむと云うことです。



原典の易経に『「蹇」を見てとどまるは知なるかな』【蹇、難也。陰在前也。見陰而能止、知矣哉】と書いてある。即ち、「象に曰く。蹇は、難なり、陰、前に在るなり。陰を見てよく止まる、知なるかな。・・・象に曰く、往けば蹇み、来たれば反る」と。

前に危険があると見たら、行くことを思いとどまる。その態度が人間の知というべきものであると、易は戒めている。「下政は城を攻む」即ち城を攻めるのは下策の意。

ここでは、備えのある敵に対して攻撃するのは大変危険である。

長篠合戦を再び私なりに易で判断してみたい。天正三年四月、武田勝頼は徳川家康を攻める為に大挙して南下し、一万五千の精鋭をもって、その国境の要塞長篠城を攻め囲んだ。急を聞いた徳川家康は、織田信長に救援を求め、三万八千の連合軍をもって駆けつけ、長篠城から四・五手前の連子川河畔に軍をとどめ、防禦陣地を構えた。

家康も信長も武田軍を恐れていた。家康は三方ヶ原合戦で武田信玄に痛撃されたことがこたえ、勝頼の代になっても武田軍との決戦をさせて逃げまわっており、信長の軍は優秀装備をもち、兵数も多かったが、何分にも急成長したものだけに、新参の未訓練兵が多く、いわば烏合の衆であり、名将信玄の統率のもとに百戦錬磨された甲州

軍ととともに戦って勝てる自信はなかった。しかし信長には秘策があった。それは織田軍の特徴である「人間と鉄砲の多いこと」に勝目を見出すことである。鉄砲は剣豪でなくとも使える。濃尾平野の農民を動員したアマの軍隊でも、鉄砲を装備すれば百戦錬磨のプロの甲州軍に十分対抗できる。しかも人数は圧倒的に多い。

信長はこの際、武田軍に決戦を求めようとし、設楽原西端に防禦陣地を構えた。そして陣前に木柵を立てて、武田軍得意の騎馬突撃を阻止し、ひるんだところを鉄砲部隊で撃ち取ろうと、いわゆる木柵と鉄砲の罠を設けて待ち構えていた。しかし罠というものは相手がはまってくれなければ何の役にも立たない。

すっかりお膳立てをすませた信長が急に心配になったのは、果たして勝頼が攻めかかって来てくれるか、ということである。ここで彼は「調虎離山」という策を考えた。鷲ヶ巢山の奇襲による敵の追い出しと、反間の謀略による敵のおびき出しである。

信長は先日投降してきた勝頼の直臣甘利新吾郎をスパイと睨み、その見ているところで最高幹部の佐久間信盛を叱りつけ、その面上に鞭をくれた。二人は平素から気が合わない仲だっただけに、ちょっとしたことで感情が尖鋭化しても不思議ではなかった。無念の眼で信長を睨み返した信盛の形相は真に迫って物凄く、人々は顔色を変え、信長の態度は重臣を遇する道ではないと、口々に非難した。

信長の陣地の第一線最左翼において、前にはり出した山の手の拠点を占領している佐久間信盛は、その夜、勝頼に内応を申し出た。「手引きしますから、私の陣地に対して、無二無三に突進されたい・・・」というのである。連子川河谷を山の手から見通せる丸山の高地（前頁地図左上）に佐久間部隊が頑張っている限り、武田軍はその右脇腹に刃を突きつけられているようなもので、とても攻撃が出来るものではない。逆にこれが手に入れば、武田軍は織田徳川軍の陣地を、その左翼から坂落しに席捲できる。勝頼は「勝った」と思った。甘利の報告と照らし合わせ、佐久間の内応は間違いなしと確信したのである。

天正三年五月十六日夜、運命の作戦会議が、長篠城を目前に控えた医王寺の本陣で開かれたが、激論に終始してなかなか纏まらなかった。主将武田勝頼の積極策に対し、武将の多くが反対して屈しなかったからである。武田の興亡に関するものだけに、ご無理ご尤もと引き下がるわけには行かなかった。

内心期するところのある勝頼は遂に断を下した。「御旗、楯なしも照覧あれ」と、攻撃策を宣言したのである。家祖源義家の白旗と源義光の具足の二つの家宝に誓っての決定は、武田家においては絶対である。信玄以来のベテラン武将たちも、こうなっては止むを得ない。黙然として座を起ち、悲痛な思いでそれぞれの陣屋に帰った。

五月八日以来、長篠城を包囲攻撃中の武田勝頼の軍は五月二十日、主力一万二千をあげて設楽原（前頁中央）に進出し、連子川を挟んで織田・徳川の連合軍三万五千と相対した。（前頁地図参照）

二十一日、決戦の日である。武田軍は朝まだ暗いうちから配備に就いて、攻撃開始の合図を今や遅しと待ち、全軍寂として声なしである。

この時、不意に数百発の銃声がすると共に大喊声が湧き上がった。頭の上、しかも後方である。昨夜、信長が秘かに放った徳川軍の酒井忠次部隊が、鷲ヶ巣山砦を奇襲して奪取したのである。

こうなっては武田軍は後へは引けない。勝頼は急いで攻撃開始を命令した。

この日、武田軍は信長の設けていた拒馬柵と鉄砲の罠にかかって壊滅してしまったのである。

長篠城～設楽原にかけての地形判断は「易」では、22頁に書いたように「水山蹇」(スイザンケン)である。「蹇」とは、あしなえ、即ち片足の不自由な人のことである。又、なやむ、とまる(停)、おごる、かたくな、おろかな者、という意味があり、易では「艮下坎上」(ゴンカカンショウ)という卦で、けわしさに行き悩む形である。武田軍は「陰を見て能く止まるは、知なるかな」(易経)の通り、行くことを思い止まらなければならない。「蹇は難なり。陰前に在るなり」である。

信長の戦術は「調虎離山」と云い、「敵をおびきだす」という戦法である。虎を調(アシラ)って山を離れしむ、即ち、虎を山からおびき出す。敵を拠点から誘い出し、敵に不利、我に有利なところで戦う策略で、「虎を放って山に帰す」という言葉と対語になっている。

自然の条件を利用して敵を苦しめ、更に人為の擬装によって敵を誘い込む。侵攻するのは危険が待ち受けているが、敵が侵犯してくれば、かえってこちらの有利になる。

信長は鉄砲の威力を発揚できる設楽原に戦場を求めて、武田軍をおびき出すことを考えたのである。そのために鷲ヶ巣山を奇襲して奪取した。又、佐久間信盛を間者として巧みに行動させて敵を欺いている。

「調虎離山」【虎を調(アシラ)って山を離れしむ】虎を山からおびきだすことである。敵を拠点からさそい出し、敵に不利、我に有利なところで戦う策略。「虎を放って山に帰す」という言葉と対語になっている。

「往けば蹇(ナヤ)み、来たれば返る」とは、『易』蹇卦のことばである。

「象に曰く、蹇は、難なり、陰、前に在るなり。陰を見てよく止まる、知なるかな。・・象に曰く、往けば蹇み、来たれば返る」(易・蹇の言葉である)

およそ、備えのある敵に対して攻撃するのは大変危険である。敵をおびき出せば、我が方に有利である、と解釈する。

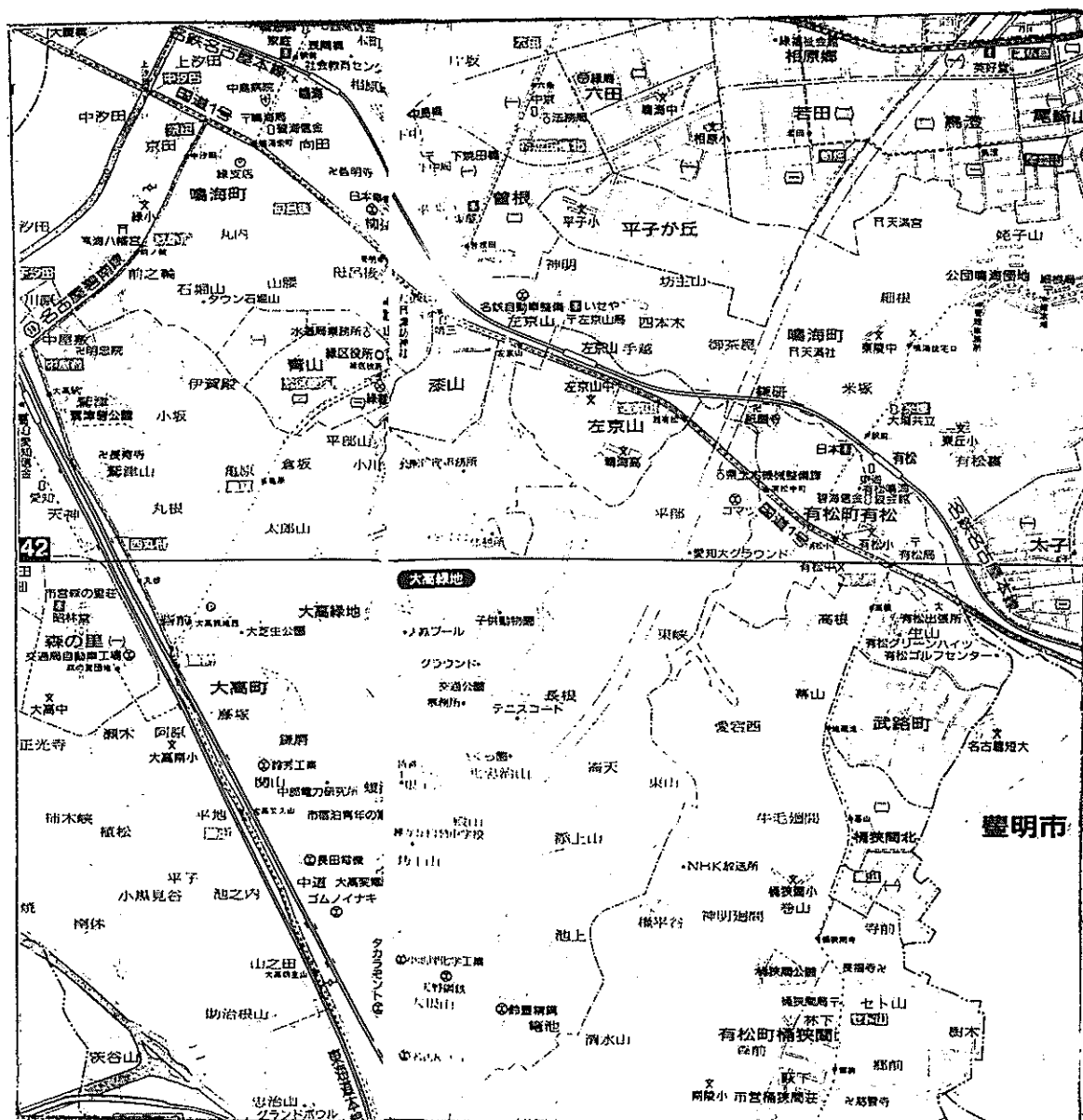
奈良の枕詞の「青丹よし」とは中国の陰陽思想における「天地」を意味する言葉と言われる。一方、中国古代の軍事家の孫武、孫臏(ピン)(この二人を合わせて「孫氏の兵法」と云う)、諸葛孔明、韓信などは、易の陰陽の調和を兵法の剛柔、奇正、進退、攻守の変化にあてはめている。戦争・戦闘の策略は変幻自在で、意外な詐術、計りがたい陰謀に満ちており、容易に身に付けられない。今頃になって易を学ぶようになったが、軍人時代に学んでいればと悔んでいる次第。

付 記

桶狭間の役

今次の「寺前会古戦場巡り」には無関係だが、平成12年3月23日、私は岳父母の菩提寺（名古屋市長区有松・祇園寺）に墓参に訪れた際、義弟（大幼48期）の案内で「桶狭間古戦場」を訪れた。その時に記述した文を紐解いて概要を書き、参考に供したい。現在の桶狭間は国道1号線の有松の町から南に入った地にあり、住宅等が密集して当時の面影を遺すものは殆んどなく、100坪ほどの小さい公園に碑が建立されているだけであった。

（下図の右下付近が桶狭間の地）



織田・今川両家の概要

南北朝の争いで楠正成や新田義貞などの諸豪が王事に奔走し、一族はことごとく滅亡した後、全国の武士は皇室のことを考える者はいなくなった。足利幕府の一党にしても兄弟が相戦い、君臣もまた相争い、特に応仁の乱以降はその傾向が強く、群雄割拠して相手の領土を奪うことだけを考え、大義は乱れて倫理観は廃れていた。

そうした武将たちの中で奸族を倒して大義名分を明きにかにし、人々に再び太陽の光を仰ぐことの出来るようにしたのは、織田信長一人であった。

信長の武名が四方に鳴り響いたのは桶狭間の一戦であった。我々大正時代に生まれた者は、小学校高学年の歴史の授業で、先生に教えられた織田信長のことは今日でも忘れることはない。戦そのものは単純なものだが、爽然としたその意気は後世にまで有名なのは偶然ではない。桶狭間の戦を述べる前に、戦役前の織田信長・今川義元の関係と、両家の形勢を簡単に記しておく。

織田家は元々、足利幕府の管領斯波家（カンレイシバケ）に仕えていた。斯波家は代々越前（福井県）・尾張（愛知県）を所領していたのだが、信長より九代前に初めて老臣に列し、斯波家の勢力が劣ろえたために尾張を自由にする事になり、豪邁で機略に富んだ信秀の時に勢力を広げた。この信秀が信長の父である。

一方の今川家は足利家と血を同じくし、義元より十代前が三河国を領し、のち代々駿河・遠江（トウトオミ）の守護となり、幾度となく幕府に加わり戦功があった。応仁の乱の時は、六代目が入京して幕府を護った。

織田・今川両家の沿革の概要は異常のようなもので、今川は名門閥として駿河に蟠距していたのに対し、織田はまだ新進の家柄でしかなかった。しかし、その背後には旧族斯波を擁した新興勢力であることを忘れてはならない。こうして両家が東西に相対峙していたのである。

両家の兵力

兵力の強弱は必ずしも人数の多寡によるものではない。軍の編成の当否、武器の精粗、軍紀、訓練の熟否、将兵の勇怯などが重要である。当時は一万石について二百五十人の出兵能力があるとされていたから、織田家では四千名内外の兵力、今川家では二万五千内外の兵力と推定される。したがって織田は今川に敵すべくもなかった。それを拮抗し得た秘密は何であったのか。それこそ軍紀、訓練、そして将兵が優れていたのではないだろうか。私の戦闘体験からでは装備する兵器の優劣である。



（右は1988・9・23桶狭間）

位置関係図

ここで城砦や戦場の地理を簡単に記しておく。(右図は桶狭間戦図)

今川の領域は駿河から西方に延びて、尾張の東部・南部にまでまたがり、犬の牙のように直接織田領に接し、愛知・知多の二郡がその接点であった。(右図参照)

愛知郡には鳴海城と丹下・善照寺・中島の三砦(右図参照)がある。三つの砦は織田方に属し、鳴海城は今川に属していた。鳴海から大高(右図参照)を経て三河以東に通ずる道の途上に桶狭間がある(知多郡、現在の有松町)。

南方こそやや平坦地になっているが、他の三方は丘陵の起伏が激しいところであった。その東北に田楽狭間(デンガクハザマ)というところが在り、距離にして100里内外の低地であった。その西南は丘陵を越えて桶狭間から大高に至り、西は中島、東は丘陵の間を通過して沓掛に通じていた。(地形図は次頁に掲載、参照)



今川軍の攻撃

① 丸根(上図左下「大高」の東側・次頁の地形図も参照)

五月十九日未明、東軍(今川軍)は進撃に移り、丸根城の攻撃を開始した。今川軍は城に迫ったが城兵はこれを退け、すかさず門を開いてし出撃した。しかし形勢は再び逆転して今川軍は火を放って城内の兵営を焼いてしまった。

② 鷺津(上図左下「大高」の東北側・次頁の地形図も参照)

今川軍が鷺津を攻撃すると織田の守兵は壘に拠り防戦に勤めた。然し攻撃する今川軍は門扉に火を放って営柵を焼いた。それに乗じて今川の諸隊は砦にせまり、激しい戦闘が展開された。尾張方の大半は死傷し、残ったものは清洲に敗走した。

織田軍の逆襲

清洲城(位置は4頁下の東海地図の左側・一宮付近)で織田方の武将たちが、いかにして今川の大軍に対処すべきか会議を開いたとき、最初に老臣たちはこう云った。

「東軍は四万を越えると聞いております。ところが味方は三千に満たない。これでは平地で戦うのは不利である。この城に立て籠もって戦うのが上策だと思いますが」。

だが、信長はそれに賛成しなかった。「およそ城をたのんで戦ったものに勝った例は少ない。また、敵がやって来たというのに、城にいて撃退しようというのでは兵の士気も安易になろうし、せつかくの志も崩れることもあろう。ここは城外に出て戦うのが一番いい。これは亡き父(信秀)が常に教えていたことだ。どうして余がその遺誡にそむき、城になど籠もっておられようぞ。生きるか死ぬかは、それは運に任せよう」。

余の心はきまった。余と心を同じくする者は余に従え」

その日(十八日)の夜、警報が丸根砦から届いたが、信長は泰然としてうなずいていただけで、べつに驚きもしなかった。そして夜半すぎ(午前二時前後)、急に法螺を吹き鳴らし、進軍を命じたのである。

熱田にまで来ると、信長に従う者は二百騎以上になっていた。ときに、十九日の午前八時ごろであった。信長は熱田神宮に参拝し、戦勝を祈願した。(部下の集合を待つ意味もあったと思われる)それが終わると部下に言った。「いまこの祠殿の中から金革の音があつた。これぞ神もまたわれを助ける御しるしなるぞ」

そのときに集った兵は約一千、すぐさま出発。神宮の南まで来ると、鷺津・丸根の砦の方向から黒煙が上がっているのが見えた。信長は鞍に跨って大声で言った。

『お前たち、今日は命を余にあずけてくれ』 このため兵たちは大いに奮起した。

信長は諸城砦の兵を合流させながら進んだ。善照寺の東まで来たとき兵の数を点検してみると約三千ばかりいた。それを信長は五千人と発表した。

鳴海方面

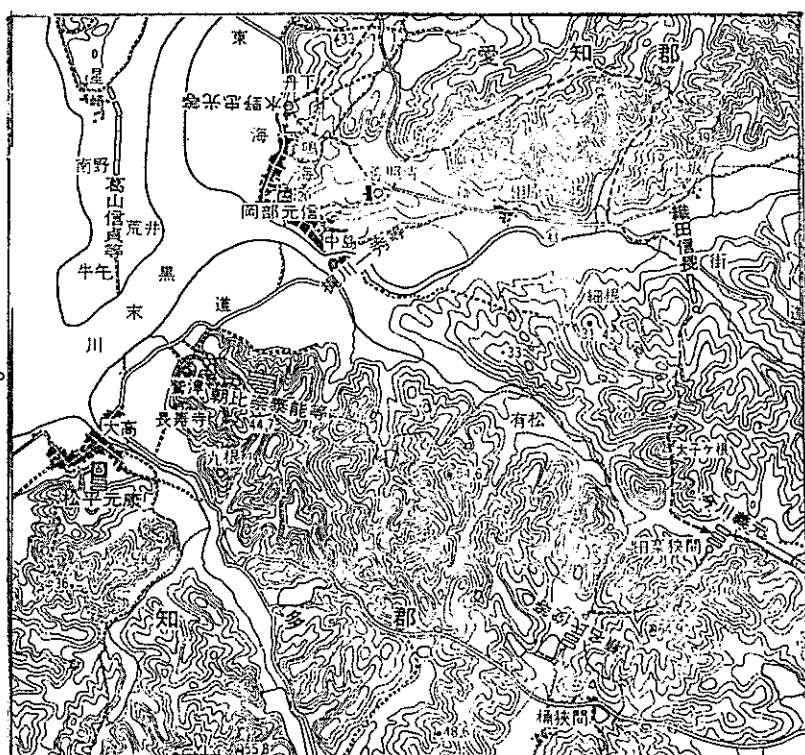
① 丹下から善照寺に分かれるところで三百騎ほどの別働隊が、鳴海方面の向うことになった。その戦で前田利家などは大いに奮闘したが衆寡敵せず大敗した。

② 桶狭間

(実は田楽狭間)

(下の地形図及び前頁の平面図参照)

善照寺において鳴海方面の敗戦を知った。その時、沓掛方面からの間者からは「今川義元はいま大



高城へ向かおうとして桶狭間に進んでいる」との報告が来た。さらにもう一人の間者が来て云った。「今川義元はただいま田楽狭間に駐屯しました」と。

それを聞いた部下の梁田政綱は信長に「今川方は瞬く間に両砦を落としたので気をよくし、きっと油断をし、備えもしないでしょう。いま静かに兵を進め、不意に今川の本陣を突けば必ず義元を討ち取ることが出来ましょう」と進言した。

信長はその進言を入れることにした。そこで若干の兵を善照寺にとどめ、旗幟だけ

を多く掲げて敵を牽制する一方、信長は約二千の兵を率いて遠まわりし（前頁地図参照）、丘陵に姿をかくして義元の麾下（キカ）に向かった。このとき信長は「名をあげ、家を興すには、この一戦こそ、またとない好機なるぞ。おのおの力いっぱい戦うがよい。ただし、全軍の勝利が大事なことから、敵の首級をあげるなど個人の功名にだけ早まってはならんぞ」と命令したという。

これより先に義元は沓掛から大高に向かう途中で、丸根・鷺津の勝利を聞いたので、幸先よしとばかり桶狭間の北方（田楽狭間）に休憩していた。そこへ更に織田本軍の一部をも撃退した報に接し有頂天になって「余の旗の向かうところ鬼神もまたこれを避く」と云った。やがて近くの神官や僧侶たちがやって来て酒肴を出し、今川軍をほめあげた。忽ち全軍が盃をあげ、肴をつつき、警備がおろそかになった。



（上の写真は現在の桶狭間の記念碑）

正午前後のことである。信長の軍は今川の陣まであと一歩のところまで迫っていた。その時、急に黒雲がにわかに天を覆い、風が吹き荒れ、雨が激しく降ってきた。それも織田側の方から今川方に向かって吹き、降ったのであった。

午後二時ごろ、織田方はやや雨足が弱まるのを待ってから喊声をあげて、山（鳴海村の太子ヶ根・前頁地図にあり）を駆け下り、真っ直ぐに敵陣をつき、縦横に暴れた。

風雨のため敵が直ぐそばまで来ていることを知らなかった今川方は、全く驚き、もしかしたら味方の謀反かもしれないと慌てふためいていた。信長の部下は槍をふるいながら義元に迫った。義元は刀を抜いてその槍の柄元を切り落とした。そこへ他の部下が義元に組み付き、遂に大将の首をはねて高々とかかげ、「敵の大將の首を討ち取ったぞ」と大声で叫ぶと、今川方の敗色はもはや決定的となった。

今川軍の武将たちの軍は、本部から一*ばかり離れたところに駐屯していた。合戦の喊声を聞きつけ、背後に回って味方を助けるために奮闘したが、織田軍の血祭りにあげられ、この隊はほとんど全滅している。

信長は敗走する今川軍を追撃しようとしなかった。直ぐ兵を集合させて引き上げた。この戦で今川方の死傷者は二千五百人にのぼると云われる。それに対し織田方の死傷者は鳴海方面以外、詳しくは分っていない。

信長は義元的首級だけを首実検し、午後四時、馬首を返して来た時の道に戻った。途中、熱田神宮に寄って神馬一頭を献じ、日が暮れてから清洲城に入った。



カトレア



ボインセチア



ヒビスカス



カメリア



アネモネ



ペオニー

あ　と　が　き

古戦場を訪れることを「枯木発榮」(コボクエイをハツス)と云う。枯れた木に花が咲き、死んだ者が生き返ることである。「枯樹生華」とも云われるが、反対に「枯木死灰」と云う語もある。枯木は冷たい灰で活気がないことの譬えとなっている。転じて心に暖かみがない人とか、情けを知らない人の譬えでもある。(莊子)

平成十八年寺前会の永代供養と奥三河古戦場の旅は、「枯樹生華」(魏志)のためであり、企画も場所の選定もそれに相応しいものであった。ここに感謝申し上げます。

再度、同じ古戦場を訪れて先ず想起したことは「兵形象水」と云う言葉である。即ち、「兵の形は水に象(カタド)る」であった。私も支那及びビルマ戦線の戦闘に四年間指揮を取り、感じたことは臨機応変の運用が肝要で、硬直した頭では戦に勝てないと云うことである。「水に一定の形がないように、戦い方にも不変の態勢はありえない。敵の態勢に応じて自在に変化してこそ、勝利を勝ち取ることが出来るのである」。指揮官には、そこに責任感が生じてくる。このことは戦いだけでなく、人生の生き方にも当てはまる面があるかもしれない。

ビルマ作戦ではインパール作戦が最大の問題になっている。第15軍司令官牟田口中将(隷下3ヶ師団)と、上官であるビルマ方面軍司令官河辺中将(隷下3ヶ軍他)とが作戦中に会談した。両者とも「作戦中止已む無し」と云う腹案を持っていたが、どちらも、それを言い出さずに終わった。戦後、両者は「相手が中止を言い出せば、それに同意する積もりだった」と回顧している。土壇場でなお責任重大な高級指揮官が「責任逃れ」を考えていたから、口に出さなかったのである。地形を無視して補給を全く度外視した無謀な作戦の結果、犠牲になった将兵は今も尚、彼の地に眠っておることを思うと断腸の思いがする。

希望的観測に頼る無謀かつ無責任な作戦を遂行した結果、出さなくてもよかった惨憺たる損害を被った。日本の軍部や政府は大敗の原因を、連合軍の圧倒的な物量に起因するとしている。しかし私は敗戦の眞の原因はもっと深いところにあると思う。

支那事変から大東亜戦争を通じて極限状態の苦勞を体験した高級指揮官は、南京攻略戦の最高責任者であった松井大將以外に皆無であった。「不受苦中苦、難為人上人」とは中国の古典の句である。「苦中の苦」即ち極限状態の苦勞を体験した人物でなければ、人の上に立つ資格がないと云うのである。(松井大將は日露戦争時の歩兵中隊長)

『三十六計』という中国・兵法書を私は戦後になって知ったが、著作年代も著者名も推定の域を出ない。その三十六番目の計、「走為上」(ニぐるをジョウとナス)とは、劣勢に処する際の計略である。「走(ニ)げる」のは三十六計中で一番賢明な策であるとするのではない。それが誤って「三十六計にぐるに如かず」と日本に伝えられた。

敵の戦力が絶対優勢で地形的にも我に利がなく、勝ち目がない時は退却せよと云うのである。即ち、退却は失敗ではなく、勝利へと転じるカギであると云っているのだ。

「走为上」の計とは、情況によって全軍退却して敵の攻撃を避けることも、用兵の鉄則だと云うのである。私は戦中も戦後も中国の兵法書を読んで来たが、当たって砕ける式の玉砕戦法は古代中国の兵法にはなかった。武士時代の日本の戦法には退却は行なわれていた。しかし我々が教育された軍人時代の兵法書の「作戦要務令」には、退却と云う戦法はあったが、精神教育上は許されなかったと思っている。そのために各戦線で玉砕が相継ぎ、ビルマの我が師団でも1ヶ聯隊と1ヶ大隊が玉砕している。

孫子は「兵力劣勢なら退却し、勝算がなければ戦わない」と書いている。呉子にも「有利と見たら攻撃を加え、不利と見たら退くことが肝要だ」と書いている。我々が参加した作戦や、太平洋戦争の戦史を読んでも、凡庸な将帥ほど、進むことを知って退くこと知らなかった。そのような人物を「匹夫の勇」と称していた。血気にはやる小勇、腕力などを振るう低級な勇氣のことを、孟子は「匹夫の勇」だと云っている。

大東亜戦争敗戦の原因はと聞かれれば、最前線に立って決死の戦闘を体験した現役将校の一人として、我が軍が精神力のみに大きく依頼したことが第一だと応えたい。天皇親率が人命軽視の戦法を生み出した精神力過大評価の日本軍に対し、連合軍は科学の粋を結集した新兵器で対抗し、最後は原子爆弾という最新兵器まで開発した。ビルマ戦線に於ける連合軍の食糧・弾薬等の補給は、トンボが舞うような飛行機からの落下傘投下であり、対する日本軍の補給は兵士が背負った背囊だけの量で、その補給も皆無であった。敗因の愚痴を云えば切りがないのである。

我々は日露戦争当時の軍の装備を以って第二次世界大戦を戦わされたのであった。その間に欧米諸国は壮烈極まる第一次世界大戦を経験し、各国軍の武器は著しく進歩改革した。ドイツ軍はイーブル戦場で初めて塩素ガスを使用して列強を恐怖させた。イギリスはタンクを使用して戦線に水を補給した結果、これは兵器に利用できると考案して、銃砲を装備した戦車を開発したのである。

第一次世界大戦では、ドイツの租借地であった孤立無援の中国・青島の戦闘しか経験しない日本軍部は、眠っていたと云われても過言ではない。日露戦争の勝利に酔い、新兵器の開発などの軍政は何一つ改革せず、兵器の劣勢を補うために精神力強化のみに重点を指向した。その「付け」が第二次世界大戦に回ってきたと云うべきである。終戦時のビルマに於いて、連合軍の将校が日本軍の装備を観て、よくもこのような貧弱な装備で戦ったものだと驚愕していたと聞いている。

「あとがき」は脱線し今次寺前会の奥三河古戦場の旅記から逸脱してしまっている。常識では「あとがき」は旅の終了後に、そして文章の最後を書くべきでもある。しかし、諸病を抱えた我が身が次第に衰弱していくことを自覚し、高齢化の速度などを考慮すると、今年の冬季間に書き上げた方が安心だと考えて書いてしまった。

「韓非子」に「巧詐は拙誠に如かず」と書いてある。「功詐」は、「下手な考えをめぐらして表面をつくろうようなやり方」のことであり、「拙誠」は「つたなくとも心のこもったやり方」である。愚直な私はこの「功詐不如拙誠」の通り、経験した自分の

過去を顧みて、老化した脳味噌の中の残骸の一部を書いた積もりである。次に「あとがき」としては不適当なことだが、最後に懐かしい青春を犠牲にして戦った中国と、戦後、全土をくまなく踏破した中国問題を書き、終わりにしたいと考えて書いてみた。

戦闘体験者は既に八十代後半に達し、生存者の地下に眠る日も遠くはないだろう。身を以って敗戦を体験した将校の一人として、日本の将来を案じない訳にはいかない。それは、戦闘と云う立場から見た中国（人）と、戦後18回も訪中した体験から、現在、日本が於かれている立場から判断して、中国は最大の要注意国だと警告したい。

現在、東亜を始め全世界の国家体制の中で、最も長期で根幹に関わるような脅威となっている国は、中国共産党政府である。今日まで全世界の安全保障を論じるとき、今までは北朝鮮やイランが取り上げられたが、現実の問題として第三次世界大戦を勃発させることの可能な国は、共産中国だけだと断言できる。

中国はそれだけの軍事力や経済力を急速に達成する可能性が極めて高い。国防予算の年々二桁の伸びは如実にこれを表している。好戦的だと言われた毛沢東時代と比較しても強大な差がある。

中国の拡大政策の恐怖は東南アジアでも、日本でも考えられないほど高まっている。台湾に対する短距離弾道ミサイルの製造は急速に伸びている。その目的は台湾を脅威するだけではない。アメリカが台湾海峡の紛争に介入するのを防止するためである。ミサイルの数は米国防省の予測をはるかに上回り、中国製攻撃機やロシア型の最新鋭艦の製造も加速して、軍事支出を増加させている。

領土的にも中国は我が国の重要な航路となっている南沙諸島の占有権を主張し、その一部を占拠している。又、遙か彼方の西沙諸島をベトナムから取り上げ、更に北側国境の一部まで占領している。

中国は近隣諸国を、その覇権主義を認める属国か、さもなければ将来的敵対国という二種類に分類しているのである。朝鮮半島北部から満州にまで続く広大な領土を有しながら、昔、滅んだ高句麗（?～668）を、中国に帰属する一民族王朝だったと主張し始めた。南北朝鮮（特に北朝鮮）は中国領土だったと主張しようと下準備している。これはチベットを手に入れた時と同じである。日本の満州進出を非難する資格はない。

ラオスやカンボジア、ビルマといった国は、既に中国の影響下に取り込まれている。ビルマの残忍な軍事政権は中国と同盟に近い関係にあり、沿岸諸島の港湾に中国海軍が自由に寄港したり、インド洋のココ諸島には電子追跡監視施設の設置を許可している。これはインドの国防関係者に大打撃を与えている。インドは自国の安全にとっての最大の脅威はパキスタンではなく、中国だと発言している。

中国人民解放軍はインド洋に新たな敵をつくっているのである。アメリカ、日本、台湾、インドが手を結ぶ時期を、中国が何時ごろと判断するだろうか。核を含めてこれが最大の問題だと私は判断している。

中国の急速な軍事力拡大の目標は、最強敵国のアメリカと台湾、南シナ海諸国、そして日本である。中国が民主国家に変貌しようとしていると考えるのは、希望的観測に過ぎない。中国人ほど外国人嫌いな民族はなく、強烈な国家主義であることを自覚すべきである。イラク戦争の結果、中国とアメリカとの衝突が、予想よりも早く起こるだろうと判断すべきでないだろうか。

中国は最近、国産空母の生産計画を発表した。空母の性格は遠い外洋に向けた攻撃兵器で、その進出計画があるからである。自国の領土や近郊の防衛・守備が目的ならば、広大な領土に点在する陸上基地で充分である。

東シナ海のカス田開発問題で日本が共同開発を提案すると、尖閣諸島は中国固有の領土だと主張して聞く耳を持たない。これは日本が中国の覇権下にある一属国だと見做している証拠である。琉球王国は中国に朝貢していたから、沖縄は中国領土だと主張して来るかも知れない。

最近の中国は小泉首相の靖国神社参拝に対する強硬な態度を更に強化した。首相の靖国神社参拝を「愚かで不道徳」だと云って中止を求めて来ている。一国の最高指導者に向かって「愚か」とか、「不道徳」という言葉を投げかけるのは、品位に欠けるばかりか、我が国特有の文化を否定し、民族を侮辱している証拠である。

これら一連の中国の反日行動に対し、日本政府の外交は今日までの態度でよいのだろうか。将来に向かって腹を据えるべき時期も近いと思われてならない。

！！寺前会諸君！！

私の過去を振り返ってみると、沢山な出会いの中で、一生に一度の素晴らしい出会い、諸兄との出会いであった。生命のある限り、この出会いを大切にしたいものだ。この喜びも悲しみも生きていればこそであり、そして生きることは年齢ではなく意欲だと思っています。

平成18年5月31日～6月1日
陸士六十期（予）四～九平成十八年寺前会
永代供養と奥三河古戦場・長篠合戦の旅
寺 前 信 次



